

# 「第9次パレスチナ医療・子供支援活動」報告

期間：2017年11月2日～11月22日

# 「第10次臨時パレスチナ医療・子供支援活動」報告

期間：2018年7月2日～7月22日



**北海道パレスチナ医療奉仕団**  
Hokkaido Medical Service for Palestine (HMS4P)



# 「第9次、第10次臨時パレスチナ医療・子供支援活動」発行にあたって

## 第9次支援活動

「第9次支援活動」は、2017年11月2日から11月22日の日程で、ヨルダン川西岸ではシュアファット難民キャンプを中心に、ガザ地区ではUNRWA（国連パレスチナ難民救済機構）が運営するリマール難民キャンプ診療所と学校で行われました。

今回の活動は、それまでの診療活動にくわえ作業療法士の参加により神経、運動器疾患の治療内容が豊かになりました。同時に子供支援活動の内容をこれまでの文化活動に加えバレーボールなどのスポーツ活動を取り入れるところまで発展させてきました。

また、イスラエルによる「軍事占領」下にある西岸や11年にも及ぶ「完全封鎖」下のガザ地区の実態の把握にも大きな力を注いできました。

## 第10次臨時支援活動

「第10次臨時支援活動」は、緊急支援活動として取り組まれました。

2018年3月30日に開始されたパレスチナの「土地の日」の平和デモは、5月15日在イスラエル米大使館のエルサレム移転を機に大きなうねりとなっています。特に、ガザ地区とイスラエル『国境』では、パレスチナ人の平和デモに対して、イスラエル軍は国際的にも批判されている実弾攻撃を行い、短期間に120人超の死者と13,000人超の負傷者を発生させました。

こうした事態に際し、WHO（世界保健機構）は5月15日に全世界に整形外科医と血管外科医へ緊急支援要請を出しました。

それまで6回にわたりガザ地区での診療活動を継続してきた私達には、UNRWA 清田明宏保健局長からも直接の支援要請が届きました。

緊急ではありますが、私達「医療奉仕団」はその要請に応えるべく準備を開始し、2018年7月2日から7月22日の期間で猫塚義夫団長（整形外科医）を派遣いたしました。

こうした活動を可能にしてきたのは、皆さんの物心両面からの支えによるものです。心から感謝するとともに、その活動記録をまとめましたので皆様のお手元にお届けいたします。

これからもご支援のほどよろしくお願いいたします。

『北海道パレスチナ医療奉仕団』一同

2018年8月10日

# 目 次

「第9次、第10次臨時パレスチナ医療・子供支援活動」発行にあたって	2
目 次	3
<b>「第9次パレスチナ医療・子供支援活動」報告 2017/11/2～22</b> .....	<b>4</b>
イスラエル出国にあたってのイスラエル当局による「抑圧的事態」について	
2017年11月21日 団長 猫塚 義夫	4
はじめに	6
第9次医療・子供支援活動「行程」	6
「第9次パレスチナ医療・子供支援」活動について - 猫塚義夫（整形外科医）	7
リハビリテーション支援 - 落合裕昭（作業療法士）	18
第9次パレスチナ医療・子供支援活動報告 - 細川 佳之（中学校教諭）	21
第9次パレスチナ医療・子ども支援報告 - 齋藤 育（特別支援学校教諭）	25
<b>「第10次臨時医療・子供支援活動」報告 2018/7/2～22</b> .....	<b>28</b>
「第10次臨時パレスチナ医療・子供支援活動」報告	28
奉仕団の声明「『第10次臨時パレスチナ医療・子供支援』活動について」	29
「第10次臨時パレスチナ医療・子供支援」活動 - 団長 猫塚 義夫	30
資 料	40

# イスラエル出国にあたってのイスラエル当局による「抑圧的事態」について

『北海道パレスチナ医療奉仕団』団長 猫塚義夫  
2017年11月21日

「第9次パレスチナ医療・子供支援活動」の最後に行われたイスラエル当局によるハラスメントの実態を報告する。ここで、トラブル？を起こし、当局の気分次第では、5年から10年間のイスラエル入国禁止処置がとられる可能性があるからだ。

そうなるのは、私達の活動そのものに多大な悪影響を及ぼしかねない。従って、パレスチナ人を思い、じっとこらえるしかない事態は、心理的に大きな負荷を抱え込むことになるのである。

今回は、その経過を報告しこれからの活動の一助になれば幸いと考える。

## ・・・・ここから約2時間の「出国チェック」が始まった。

第一関門で・・・・女性監査官が私のパスポートを見て名前の確認と本人確認

イスラエルでの旅行目的、期間、滞在ホテルを聴かれる

その後：男性監査官に変更・・・・

Q：旅行の目的は何か・・・・

A：パレスチナへの医療支援です

Q：どこで行っているのか・・・・

A：西岸地区・東エルサレム、シュファット難民キャンプとジェリコアクバドジャベル難民キャンプ及びガザ地区です。

Q：どんな病院で行っているのか・・・・

A：UNRWA（国連パレスチナ難民救済事業機関）の診療所が中心です。

Q：どんな人を診ているのか・・・・

A：整形外科関係の患者さんです。例えば、腰痛・ひざ痛などです。

Q：パレスチナ人だけ診ているのか・・・・

A：それ以外の患者さんが来れば全て診ています。

Q：何故、パレスチナへの支援ばかりをしているのか（これが最もしつこい）

A：UNRWA 清田先生と友人です！！！！

Q：機関はあるのか、NGOか・・・・

A：「北海道パレスチナ医療奉仕団」（HMS4P）というNGO団体です。

Q：費用はどこから出ているのか・・・・

A：寄付と個人負担です

Q：南アフリカなど、他国へは何故行かずイスラエルばかりなのか・・・・

A：ベトナム、タイなど東南アジアへも行ってきます。

以上のやり取りをしているうちに、別の場所へ案内され、さらに同じ質問を繰り返してきた。

荷物（スーツケースとリュック）をすべてあけられ検査。

スーツケースは遠くで開けられていた。

特に、カメラと書籍を入念にチェックされた。

カメラ（CANON 7D Mark II）の内容確認・・・・

Q：イスラエル兵の映っている箇所・・・・

A：旧市街ダマスカス門の前で取りました

本：「パレスチナを知るための60章」346ページ

Q：アラファトが写っているページを開いて説明を求められる・・・・

A:この本は、パレスチナを説明している本です。

その後、さらに上司の男性が来て、同様の質問をした後、40分程度待たされた。

その後、女性職員がC X (Cathay pacific) (ビジネスクラスカウンター) に案内してくれて、チケットを発行し、スーツケースを受け取って同行荷物とした。(この時点で出国可能と判断した)

さらに彼女の案内で・・・手荷物検査場へ・・・

チェックされた人々が検査されるところで、「優先的」に検査が始まった。

ここで50分ばかり・・・まず、「正露丸」の匂いがチェックされ、説明後クリアー・・・その後、リュックの中の中まで、それぞれの包みをすべてあけて検査、これを5回繰り返されました。履いている靴もチェック、身体はエレットと同じレントゲンでチェックされました。また、その時後方から下着の中まで手を入れ、「女性みたいだ・・・」などと男性検査官が口走っていました。

ここを「パス」して、出国許可・・・電子化されており他の二人はOKでしたが、パスポートのICチップが破損している私は、従来通りの面接方式で完了することができました。

このたびの出国時の「抑圧的事態」にあたって・・・

イスラエルとパレスチナの緊張関係の中で、イスラエルによるパレスチナ支援団体、個人へのハラスメントが随時行われ、私たちがチェックされた。

イスラエルが「奉仕団」とその活動をチェックし始めたのかも知れない。 検査内容も インタビューで「何故、パレスチナを支援するのか？」というのが一番しつこく、また写真や本の中までも詳しく検査された。

11月16日のガザ入国できなかったこととの関連は不明だが、その時もカメラ＝画像・映像記録へのこだわりがあった。(検問所の撮影と公表・・・) ここでは、すでにイスラエルにプロファイリングされている可能性があるかも)

しかし、今回もUNRWAからの「活動証明書」は、大きな力になった。

こうした事態にあたり・・・

パレスチナとガザ地区に置かれているパレスチ人の無権利状態が如実に示された。国内外へ移動するのにこうした規制・抑圧・弾圧が日常的に執行しているのがイスラエル。また、パレスチナを支援する国外からの活動家に対してのハラスメントは、すなわち「パレスチナを助けるな」ということなのだ。

これらは、国際人権問題として取り上げられる課題なのだ。10年間の入国が禁止されている大野木さんが抱えている問題が本当にあるものと理解できるのであった。

そして、これらに向って何とか打開する道は、イスラエルの占領状態を解決することなしには根本解決はないが、私たちはそれまでの間あらゆる手段を用いて「支援活動」が継続・発展できるように努力を惜しんではならない。

こんなことで支援活動が抑制・中止とされたらどうなるのか・・・多くのパレスチナ人が貧困・抑圧・弾圧・「封鎖」の中での生活を強いられている今、「ガザの自由へ針の穴」をあけている私たちは、まずその「穴」を確保しつつ、少しでもその「穴」の拡大へむかいたいと考える。

## 今後の課題

1) 万が一、入国拒否の場合に備えて、数通りの支援活動の計画を立てる事。例えば、ヨルダンなど他国でのパレスチナ人支援・・・

2) イスラエルの「入国」をヨルダン経由にすることも検討

3) 今後のあり方をUNRWAと相談し検討する

帰国の機内で観た映画で元気を取り戻すきっかけを得ることもできました。

「ブレーブハート」：メルギブソン主演・監督・製作。14世紀、スコットランド独立に関する物語。メルギブソンが演じるウィリアム・ウォーレンの誠実さと力強さ、弾圧に立ち向かい、独立へ向けた情熱と行動に胸が打たれます・・・すでに5回ほど観ていますが、また感動しました。

「I am Legend」：ウイル・スミス主演のホラー活劇の中で出てくる音楽を説明するセリフの中で・・・『世の中を悪くするやつは一日も休まない、休んでいられるか』という場面にはげまされた。

# はじめに

2017年11月2日

今年は、パレスチナの地にイスラエルが「侵略的建国」（1948年）を始めてから69年、第3次中東戦争（1967年）でヨルダン川西岸を軍事占領してから50年、ガザ地区を完全封鎖（2007年）し『天井のない牢獄』状態としてから10年目になります。

そして、私たちが2011年2月にパレスチナで「医療支援活動」を始めてから9回目になります。この6～7年の取り組みは、私たちが活動する北海道・札幌を中心に一歩、一歩前進してきました。

特に、今年は京都大学岡真理教授研究室主催の講演会や神戸市民講演会を初めとして、中学校や高校、看護専門学校、及び市民講演会で、パレスチナ、ヨルダン川西岸とガザ地区の実態と活動の様子を報告してきました。

また、7月には、東エルサレム・シュファット難民キャンプからサリム医師夫妻を札幌に招き、医療関係者と市民の皆さんに「パレスチナの今」を語りました。同時に、沖縄へも同行していただき、沖縄大学をはじめ5か所で「沖縄とパレスチナ」の共通性と同一性を語り合いました。イスラエルの軍事占領下にあるパレスチナと米軍基地に苦しめられている沖縄との「心の交流」は、今後の双方の連帯を作り出す第一歩になったのでした。

10月には、若干26歳のパレスチナ若手医師であるモハンマド氏と看護師、薬剤師さんを招いて札幌での医療技術研修も行いました。

10月下旬、ガザ地区で「結合双生児」（ベトナムで発症させられた、ベトちゃん・ドクちゃんでお分かりのことと存じますが・・・）が生まれました。これは、昨年11月につづくもので、ガザ地区の環境汚染が相当深刻な事態になっていることを物語っています。

今回の「活動」では、その実態をできるだけつぶさに見極め、皆さんに報告できるようにいたします。

## 第9次医療・子供支援活動「行程」 2017年11月2日～11月22日

	A-group	B-group	活動内容
11月2日	木 札幌発	札幌発	新千歳 16:00 発 ～香港経由～ 3日 07:10 テルアビブ着
3	金 エルサレム着	エルサレム着	シェイクジャラ反占領デモ参加 Salim 先生「打ち合わせ」
4	土 西岸	西岸	診療・子供活動（平和ポスター）、スポーツ活動（バレーボールの準備）
5	日 gaza 1 入国	gaza 1 入国	AM ガザ「入国」 UNRWA へ挨拶（医療局・教育局） 投宿
6	月 gaza	gaza	診療・子供活動（平和ポスター）、状況視察
7	火 gaza	gaza	診療・子供活動（折り紙）、スポーツ活動（バレーボール）
8	水 gaza 1 出国	gaza 1 出国	子供活動（折り紙） PM ガザ「出国」
9	木 西岸	西岸	診療・子供活動（音楽・工作）、スポーツ活動（球技 Childcenter） アフメド宅・昼食
10	金 西岸	西岸	ピリン村へ・・・ハイサム氏、ラニー氏 岡崎慎治参加
11	土 エルサレム発	西岸	休憩 ヘブロン視察、イッサ氏、ツレーハさん・・・C P 患者さん診療（12:45 テルアビブ発～香港経由）
12	日 札幌着	西岸	診療・視察（～14:50 新千歳着）
13	月	西岸	診療・視察 ベドウイン視察・診療
14	火	西岸	新千歳 16:00 発 ～香港経由～ 3日 07:10 テルアビブ着
15	水	西岸	診療
16	木	西岸	「独立記念日」 ムラド氏とジェニン視察
17	金	gaza 2 入国	AM ガザ「入国」・・・拒否！！
18	土	gaza	診療（リマール HC） ベイト・ハヌーン、イマンさん宅訪問 マカドマ先生宅
19	日	gaza 2 出国	gaza II 出国 診療（リマール HC） UNRWA 挨拶（医療局・教育局） 午後ガザ「出国」
20	月	西岸	ジェリコ・AQBJHC で診療 エンスルターン HC 視察 サリム先生と夕食診療総括
21	火	エルサレム発	イスラエル出国 12:45 テルアビブ発～香港経由～
22	水	札幌着	14:50 新千歳着

A-group クイン明美、細川佳之、齋藤育氏

B-group 猫塚義夫、白山晴雄、落合裕昭氏





# 「第9次パレスチナ 医療・子供支援」活動について

北海道パレスチナ医療奉仕団 (HMS4P)  
2017年11月 猫塚義夫 (整形外科医)

2010年7月「北海道パレスチナ医療奉仕団」が結成され、今年で9回目の医療支援活動を施行することになりました。これも皆様からの支援によるものであり、心から感謝いたします。

今年は、1967年第3次中東戦争により、パレスチナのイスラエルの軍事占領が始まって50年目となる節目の年でもあります。

ご存じのようにイスラエルの占領が続くパレスチナでは、イスラエル政権と入植者による人権抑圧政策が強化されています。東エルサレム、ヘブロン、ヨルダン渓谷など、シオニスト政権の下でイスラエル軍とそれに庇護される入植者によるパレスチナ人への人権侵害と土地強奪は、一層激しさを増しています。「国際法」違反でもあるイスラエルの「入植地政策」は直ちに停止させなければなりません。

また、「完全封鎖」状態の「ガザ地区」では、燃料不足のため1日の通電時間が3時間となり、燃料不足に起因する浄水施設の稼働停止は、環境汚染と住民の健康被害を深刻化させています。まさにこれは、イスラエルによる「緩慢な殺人」が行われている状況です。

## こうした中で実施される今回の支援活動の目的

1) 医療活動として、東エルサレム・シュファット難民キャンプと「ガザ地区」・リマール難民診療所での診療活動、並びに「腰痛体操」のDVDを用いて難民キャンプでの「運動療法」の普及を行います。また、リハビリ医療への支援を展望した障害者の実態の把握と技術伝達を行います。

2) 特に悲惨な状況に置かれているパレスチナの子供たちに向けて「子供アクティビティ」を発展させます。今回から札幌の中学女子バレーチームの現役監督の参加を得てバレーボールを通じた「スポーツ交流」も開始いたします。

3) ガザ地区とヨルダン川西岸でのパレスチナと住民が置かれている厳しい現状をつぶさに観察し、皆様に報告いたします。

4) シリア・イラク問題への解決に向けて、中東問題の根源である「パレスチナ」からその現状と方向性を学びます。

5) 安倍政権による「安保法制」の下、「集団的自衛権」行使が予想される中東で、日本の平和憲法を基軸にした「中東和平」への貢献のあり方を実践的な方法で検証したいと思えます。

6) また、「沖縄とパレスチナ」の共通性と同一性を現地の人々との交流で深めます。

**期間：**2017年11月2日から11月22日まで。

**メンバー：**猫塚義夫 (団長 整形外科医師)、白山晴雄 (事務局)、クイン・明美 (心理療法) 落合裕昭 (作業療法士)、細川佳之 (教員)、齋藤育 (教員)

**在札幌本部：**宮島豊 (本部長)、松本一敏、西岡利泰、長谷川昭一、清末愛沙、高崎暢弁護士

皆様からのご理解とご支援を心からお願い申し上げます。

## ■ 11月3日 (金) 1日目

午前7時前に、千歳を発ち香港経由で21時間の行程でテルアビブ・ベン・グ

リオン国際空港へ着きました。私の9年目のパスポートのICチップが破損している事が千歳で判明し、イスラエル入国時に万が一、「入国拒否」にされた後の次の手を考えながら入国審査へ……。結果は、OKでした……。何かのトラブルで、もし今後5～10年間の「入国拒否」が続けば、私達のパレスチナ支援活動に大きな障害が生じるのです。

エルサレムへ移動し、宿舎へ投宿後早速旧市街地の状況視察に出かけました。

旧市街で最も賑やかなダマスカス門へ……。早速イスラエル軍兵士が監視／歩哨に立つ姿がいやがおうにも目に入ってきます。昨年よりも兵士の数が増え、仕掛けも多少強固になっているかの様でした。

そうした姿は、旧市街の中でもあり、「繁華街」であるオーストリア・ホスピスの前では、パレスチナ青年を壁に向かって両手を上げて立たせて尋問と身体検査をする出来事が目の前で繰り返されていました。イスラエル兵による尋問がまかり通る「軍事占領」の現実を突きつけられ、そのパレスチナ青年の無念さに心が痛むとともに、「パレスチナへ自由を」求める取り組みの大切さを痛感させられるのでした。



その後、シェイクジャラッ通りの「反占領デモ」に参加・・・私達6名を含めて総勢50人で、毎週金曜日に国際的な参加者とともに通りに立ちました。ここでの主な論点は、イスラエル軍による「占領反対」と「入植地建設反対」であり、スローガンのスタンディングとして取り組まれていました。

代表者の言葉・・・私たちは、絶対にあきらめない・・・が心の奥底まで届いてくるのでした。これと同じ言葉が、今年7月にパレスチナ人医師のサリム氏と沖縄を訪れた時に語られていました。まさに、パレスチナと日本・沖縄の現実が共鳴し合うその現場のひとつが本日のデモでありました。



夕方、そのサリム先生ご家族に宿舎に来て頂き、わたしたちと夕食を共にすることができました。

さあ～、明日から診療、子供支援活動、そして子供たちとのバレーボールを通して「スポーツ交流」が始まります……………

## ■ 11月4日（土）2日目

今日から「支援活動」を開始いたします。

場所は、エルサレム中心街・「旧市街」から北方4kmに位置するシュファット難民キャンプです。1キロメートル平方の面積に約65,000人が暮らす超過密な難民キャンプです。環境汚染が一層進行し、このままでは「人が住めない」地域へと変貌せざるを得ないところです。毎週のように武装イスラエル兵（IDF）が侵攻し、昨日は200人のIDFが3名の少年が拉致・逮捕して行きました。「パレスチナ人も行きたがらない難民キャン

プ」となっています。

その出入り口にはイスラエルによる検問所（Check Point = CP）が設けられ、民兵（入植者）も入り込んで人の出入りを厳重にチェックしているのです。勿論、私達日本人も例外ではありません。



しかし、ここではサリム先生が所長を務める難民キャンプ診療所が中心となって難民とその周辺の人々の健康を守る取り組みを続けているのです。

今日は、ここで診療と子供支援活動としての「平和のポスター」作製・展示、そしてバレーボールによるスポーツ交流の下準備を行いました。

19人の診療の中で、11月1日難民キャンプに侵攻してきたイスラエル兵に左下腿（脛）を撃たれた男性（現在創部の化膿が持続）や昨年友人がイスラエル兵に虐殺され過剰な心理的負荷を強いられている男性など、イスラエルの軍事占領の下で暮らさざるを得ない人々の状況が反映されるのでした。（詳細な診療結果は、国連UNRWAへの報告を兼ねて後日公開いたします）

診療では、同行している落合裕昭作業療法士による運動療法が一人ひとり丁寧に行われていました。

また、待合ロビーで行われた「平和のポスター」作りに、齋藤育さん、クイン明美さんがあたり、子供づれの母親も含めて多くの患者さんや子供たちから絵の提供を受けることができました。これらを日本から持参した「鳩の絵」と一緒にして平和を希求し平和へ向かって飛び立つ「鳩の群れ」を壁に展示するのです。昨年の取り組みは、1年間診療所の壁に展示され続けられていました。これも「パ

レスチナ～日本」間の「心の交流」から「文化の交流」へと発展して行くことを心から願っています。



同時に、「第9次、支援活動」の主要課題の一つであるスポーツ交流の準備がおこなわれました。劣悪な生活・スポーツ環境の下でもどのようにしてバレーボールでの交流ができるのか・・・現役バレーボール監督の細川佳之さんと事務局長の白山晴雄さんがモハンマド医師の案内で、その調査を実施……………しかし、いまのところバレーボールのコートやネットなどありませんが、細川先生の発案と準備で後日「交流」が始まることを楽しみにしています。

このように、医療活動と同時に子供たちに向けた文化・スポーツ交流がこれからはますます発展させなければならない課題ですが、教職にある細川さん、齋藤さんたちの創意あふれた取り組みが期待されています。

本日の診療には、エルサレム在住の邦人、ガリコ美恵子さんの御協力を受けています。「第1回支援活動」から私達の活動を支えてくれている美恵子さんの詳細は後日に報告いたしますが、その明るさと誠実さとエネルギーは、パレスチナで活動する私達に貴重な情報と無類のエネルギーを提供してくれるのです。

美恵子さんのFace Bookのアドレスは、

<https://www.facebook.com/search/top/?q=mieko%20galiko>

その後、夕暮れがせまり、夕陽に映えるシュルワン村へ……………今、イスラエルによる入植活動が進むこの村……………パレスチナ人による「入植活動反対テン



ト」が先日イスラエル兵によ無残に破壊されていました。5年前に私たちがここを訪れた時にあった「We shall overcome We shall overcome」の歌詞が書かれていたテントもです……。

さて、明日は、いよいよ10年間の「完全封鎖」が続き、人間の生活が困難になり……さらには「人間の生存」が脅かされているガザ地区への「入国」です。

## ■ 11月5日(日) 3日目

本日から11月8日まで、「GAZA 1」と銘打ち、診療と「子供支援活動」を重点にした活動を予定しています。(ちなみに、「GAZA 2」では診療と障害者リハビリが重点となります)

午前8:00に宿舎に国連UNRWA(パレスチナ難民救済事業機関)の公用車が私たちをガザ地区へ唯一「出入国」可能なエレット検問所へ移動させてくれました。

途中は、道路の両脇にはイスラエルの穀倉地帯が続きます。その昔、平和な時期ではこの豊かな土地でパレスチナ人が



農業を営んでいたのです。

約1時間の乗車の後、エレット検問所へ……相変わらず大きな検問所で、そのセキュリティは、世界一の厳しさを有しているとのこと……勿論、ここでも入植者(民兵)が自動小銃を肩からぶら下げてうろうろそのあたりを歩きながら、通行者を監視しているのです。

イスラエルからの「出国許可」を受けた後、細い無機質的な通路を歩き、その先にある頑丈な「回転ドア」を通過すると……そこがガザへの『入口』でした。こうした行為自体がまさに『天井の

ない牢獄』＝「ガザ地区」への入り口であることを実感させられるのでした。イスラエルにとっては、ガザの住民は「囚人」扱いなのか……怒りが沸々と湧いてくるのでした。

その後、続く金網で作られた1.5kmの『通路』を重いリュックを背負い歩いて、ガザ地区へ向かうのです。まさに、これから行くガザの住民の気持ちに自分の心



をどれだけ同化できるのだろうかと自問自答しながら……。

ガザへ「入国」しパレスチナ自治政府による「入国審査」を受けた後、迎えに来てくれたUNマークのついた国連車でガザ地区内、UNRWAのGAZA現地事務所へ向かいました。

途中、気になったこと……運搬作業にラバや仔馬が動員されているようでした。これも「完全封鎖」によるガソリン不足によるものではないでしょうか……ラバや仔馬など、どことなくやせ細っているかのようでした。

UNRWAでは、保健部門のシャケル先生と今回のスケジュールの打ち合わせを行い、その後、シャケル先生の尽力で教育部門のリーダ女史、タウフィック氏と会うことができました。

その結果、11月9日(火)午前、細川先生の参加の下ザイツーン女子中学校でバレーボールの講習を行うことになりました。こうした「スポーツ交流」は、私達にとって初めての経験ですが、現地での期待の大きいことを感じました。

ガザ地区では、「公園」など子供たちにとっての遊ぶ場所が決定的に不足しています。また、宗教的に中学女子になると「運動」することに否定的な風潮が社

会的でありました。これにより、女性の発育が十分でないことがこれまでも指摘されてきました。

しかし、近年はスポーツにおける女性の進出が進み、女子サッカーやソフトボール、卓球などの試合が社会的に公認されるようになってきました。実際に、中学校の授業でも12月にバレーボールの授業計画があるのでした。

今回のバレーボールの取り組みの中で、今後の課題を明らかにし、来年の「支援活動」の準備に生かして行くつもりです。

午後6時前になるとガザ地区沖の地中海につるべ落としのように夕陽が沈みます。何回見てもこの「ガザの夕陽」に感動させられるのでした。

「ガザの解放」と「パレスチナに自由を」の叫びを諦めず、明日に向かって活動を前進させつつ意思を高めながら地中海の



向こうに沈む太陽を見送るのです……いつかきっと……

夜になると燃料の欠乏による「電気不足」(現在の一日の通電時間はたったの3時間)のため、屋外の暗さが気になるのでした。

## ■ 11月6日(月) 4日目

今日からガザ地区、UNRWA・リマールクリニックでの診療と「子供アクティビティ」を実施しました。

整形外科的患者さんを15名を診察……ここでは、腰痛患者さんが多く、特に手術後の遺残腰痛・下肢痛への相談が多くありました。これまで5回にわたるガザでの診療活動の結果、ガザ内・他病院での治療に関してセカンドオピニオンを求



めて受診することが多くなっていると思われるのです。

リハビリ・運動療法による治療には落合裕昭先生が身振り・手振りで、懇切丁寧に指導することにより行われて成果を上げていました。また、同行しているクイン明美さんが女性患者さんを側面から心理的にケアしてくれたことは、患者さんに疾患と治療方法を理解していただく上で助けになりました。

この途中、当クリニックの理学療法士のムタツさんが診療に参加し、来年までにリハビリの指導パンフを「奉仕団」とリハビリ部門で協同して作製することになりました。

これも、医療支援活動が一步前進することにつながることになるのです。

一方、クリニックの一角を借りて、齋藤育さん、細川佳之さん、白山さんたちが鳩の手形にメッセージと絵を記入して頂き、その鳩を平和な未来へ向けて群れをなして飛立つ姿を作り、クリニックの壁に展示したのです。これには、来院している患者さん、子供たちとその親御さんなど60～70名の参加で大成功でした。この取り組みは、今後とも継続し「奉



仕団」のシンボル活動にすることが可能になった様です。

宿舎に戻った後、以前北海道大学・工学部に留学していたリームさん、若手企業家のアマルさん、ガーダさんの訪問を



受けました。

リームさんは、北大留学時に研究した「環境工学」の成果を生かしてガザの環境問題に取り組んでいました。優秀な彼女ですので、ガザの再生にきっと大きな力を発揮するに違いありません。

その後、ガザでは抜くことのできないマカドマ先生にお会いする事ができました。1年ぶりの再会です。

ガザの失業率が上昇し、貧困も広がっている事、通電も1日3～4時間、環境汚染も深刻なことなどを話しあった後、10月22日にガザ地区・ジャバリア地区で生まれた「結合双生児」について先生の見解を伺いました。誠実なマカドマ先生は、それに関して様々な角度からの説明を展開し、発生学的、遺伝学的、環境汚染因子などについて洞察の深さを教えてくれました。

ガザの汚染水の排泄で、ガザ港の海水は、汚れているのが波しぶきを見てすぐわかります。その波しぶきが茶色けを帯

びているのですから……今日の「ガザの夕陽」もつるべ落としです……明日の天気がよい事を願って……

明日は、細川さんを中心にバレーボールによる「スポーツ交流」が待っています。

私達の「支援活動」が新たなステージとなる大切な1日になるのです！！！！

## ■ 11月7日(火) 5日目

イスラエルによるガザの「完全封鎖」が続いて10年にもなっています。ガソリン不足により、ところによっては1日の通電時間が1時間に制限されている地域もあました。夜間、リームさんの運転に同乗させていただきましたが、やはり周囲が真っ暗な道路があり生活環境の深刻さがより進行しているのを実感しました。現在行われている自治政府とガザ・ハマス政権との「合意」を契機にして、「完全封鎖」を10年ぶりに解除されることを願ってやみません！！！！



マカドマ先生と再会

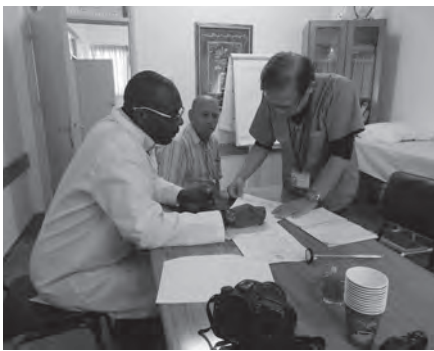


さて、今日の取り組みは、診療とともに「子供支援活動」として①小学校での折り紙教室と②中学校でのバレーボールによるスポーツ交流です。

特に、②は今年から新たに開始する「子供活動」であり、必ず成功させなければならないという・・・緊張する一日となりそうです。が・・・落ち着きはらっている細川佳之先生へ信頼感がじわじわ湧いてくるのでした。

診療は、2時間と限定し「子供支援活動」に備えました。今日は、アラビア語～英語の通訳にムタツ理学療法士さんがついてくれました。私の診断の後、ムタツさんと落合さんが協働して患者さんに運動療法を指導してくれました。

来年までにいくつかの疾患の運動療法のパンフ作りをリハビリ部門と「奉仕団」が協力して行うことにしていますが、今日はお互いのリハビリ部門がそれを実践的に行うことが出来たのです。ムタツ理学療法士は、落合さんが行う運動療法を熱心に患者さんに伝えるとともに、しっかり学ぼうとする姿勢に誠実さを感じることができました。



また、今回のガザでの診療の特徴として、「セカンドオピニオン」を求めてくる患者さんが目立ちます。ガザ地区だけに限ると2013年以降今回で5回目となる「診療活動」の積み重ねの結果、私たちへの「信頼」とも受け取ることがきます。また、その内容は、現地の医師による手術治療のお薦めに対してのものと手術後の遺残症状に関するものが多くありました。しかし、こうした「セカンドオピニオン」への結論は、慎重でなければ

なりません。今後の臨床経過を診たり、すでに行われている画像検査を参考にするためにも来週の「GAZA 2」への期待がかかっています。

その来週には、脳性マヒの子供の受診が「予定」されており今回同行している落合さんの出番が待っているのです。何とか成果を上げ、来年につながる活動になることを願っています。

2時間の診療の後、国連車に同乗して、すでに「折り紙教室」を行っていたアスマ女子小中学校で4人をピックアップし、バレーボール会場となるザツーン女子小中学校へ向かいました。



そこに到着後学校構内へ入ると、歓迎セレモニーとして20～30名の生徒たちが手製のプラカードを手に私たちへの感謝の意を示す掛け声やダンスを披露してくれました。

ここでバレーボールを実施することが決まったのが1昨日でしたが、短期間にこうした準備をしてくれた現地の先生と学校の熱意に身の引き締まる思いでした。

パレスチナでは、女子・女性が公的にスポーツを行うことに対する「社会的抵抗」が依然残っています。しかし、今回の様に私達の「スポーツ交流」への理解の深まりは、パレスチナ社会の一定の「進歩」と言えるかもしれません。

ご存じのように、スポーツは一定のルールの下に、心身のスキルを競い合うものです。特に、バレーボールはコート内ではネットを挟んで向かい合うためぶつかり合うことのない「ノンコンタクトスポーツ」であり、しかもチームワーク

を必要とする代表的なスポーツです。

今回は、札幌の中学校女子バレーボールチーム監督の細川佳之さんがこの取り組みの中心となっているのです。対象が全くの初心者であったにもかかわらず親切で丁寧な指導が行われていました。また、現地に赴任中の吉田美紀さんが参加され、学校側との交流・実技時の通訳などで大変お世話になりました。



見ているとバレーボールは、メンタル的にも、身体スキルのにも容易なスポーツではありません。来年は、現地で指導する教師への「特別授業」の開催と数日間の「取り組み期間」の必要性が細川さんから出されていました。これも来年への「課題」としてしっかりと受け止めることになりました。

宿舎に戻ると、ガザ地区に在住するシュファト難民キャンプ・サリム先生の親戚の男性の訪問を受けました。ガザ地区にあるキリスト教関係の病院への支援のお願いでした。これまで5年間継続してきた「支援活動」の実績が、徐々にガザ地区の中で浸透してきたのかもしれませんが、早速、持ち帰って「奉仕団」としての結論を出さなければなりません。が・・・、多数の医師の参加が必要である事は言うまでもありません。

夜は、北海道大学・工学部へ留学し、現在はガザ地区で環境問題に取り組んでいるリム女史宅へ夕食に招かれ、伝統的なパレスチナ料理で活動のエネルギーをいただくことができました。

それにしても筋骨隆々の弟さんとの「腕相撲交流」では、あっさりと完敗で

した。それも相手が体を持って余している20歳代のパレスチナ青年です・・・それも当たり前ですが・・・その反面、さわやかな嬉しさがこみ上げてくるのでした・・・パレスチナの若者たちへのエールとして・・・。

## ■ 11月8日（水）6日目

本日は、「GAZA 1」の最終日です。

「子供支援活動」で活躍された齋藤さん、クインさん、細川先生の3名のガザでの活動は、今日で終了です。

宿舎の朝食を全員で済ませ、リーマル女子中学校へ向かいました。曇天の今日のガザ港の海水は、どことなく茶色ずんで見えました。勿論、汚れた海水の波しぶきが茶色っぽいのは先日と同じなのですが・・・。

診療はお休みとし、6人全員で「折り紙教室」に出かけました。

会場の教室には約40人程度女子生徒がお行儀よく座って、私達の到着を待っていました。メンバーの自己紹介の後、早速、齋藤さんが白板の前に立ち、子供たちに新聞紙による「兜」や色紙による「お雛様」や「鯉のぼり」の作成に取り組みました。このORIGAMI PERFORMANCE（オリガミ）は、日本独特の主に正方形の紙を折りたたんで動物や植物、道具等の様々な形を作る日本伝統の遊びであります。子供たちとの「文化交流」には最適な行事なのかもしれません。



終了後、10名の生徒たちによるお礼をこめた「パレスチナダンス」が披露されました。教室から校庭に出ると多くの生徒たちに取り囲まれ訪問への感謝を受けるのでした。

齋藤育さんが中心となって行ったこの(12)

「折り紙」教室の開催も大成功でした。

今回の「第9次支援活動」でのバレーボールや「折り紙」教室による「子供支援活動」をこれからも継続して行く事が強調されていました。「医療奉仕団」のパレスチナ支援活動が、診療活動を基本としながらも「子供支援」にウイングを広げ、さらにバレーボールによる「スポーツ交流」に着手できた事が今回の最大の成果であります。これからも皆様からの御支援を基礎に活動の継続・発展を誓って「GAZA 1」を終了させたのでした。

その後、イスラエルに向って1.5Km 続く金網通路を重い荷物を背負って歩くのです。

あのイスラエルの厳しい「検問」を通りエレッツ検問所を出た後は、例によって空からの監視バルーンの挨拶？を受けました。

それらを写真撮影していたら、どこからとなく自動小銃を肩から下げたイスラエル民兵＝入植者が私を「尋問」し、写真内容をチェックしたのでした。しかし、そうしたことに負けるわけにはいきません。不当にも「天井のない牢獄」に10年以上も「拘留」され自由を奪われているガザの住民の様子が私の脳裏に浮かぶのですから・・・。

## ■ 11月9日（木）7日目

今日から、再びヨルダン川西岸・東エルサレムにあるシュファット難民キャンプでの「診療活動」と「子供支援活動」が再開されました。

前日サリム所長から「多くの患者さんが来るかも」との予告があり心して午前7時に宿舎を出発・・・。

例の厳重な「検問所」を無事通過して、クリニックに到着。すると、英国・スコットランドからシュファット・難民キャンプに支援に来ているゲイノル女史と面談・・・彼女の口から私達の「奉仕団」が医師や教師、作業療法士など多彩なメンバーで構成されていることに評価するコメントをいただきました。今後の、

難民キャンプでの活動を共に行うことになったのです。



案の定、女性を中心とした患者さんが受診され、診断のあと落合作業療法士の懇切丁寧なりハビリ指導が功を奏して、多くの患者さんが「シュ克蘭」（アラビア語で「ありがとう」の意味）を発して診療を後にしてゆきました。

やはり、腰痛・ひざ痛が圧倒的に多く、肥満と運動不足がその原因となっていることは自明です。問題は、何故肥満になるのか？何故運動不足になるのか・・・イスラエルによる軍事占領がこれらの原因のほとんどが占められているのです。これらについて、改めて「論考」の予定です。

診療後、難民キャンプ内へ往診診療で、膝痛の女性と運動障害の若者の診療が続きます。

その途中、迷路となっているキャンプ内を歩きました。そこは、狭い通路で家々が肩を寄せ合い、通路には下水が流れ出し、子供達も通路が「遊び場」になっているのです。清潔とはいえない環境で生育せざるを得ない子供たちを見ていると心が痛むのです。また、裸のままの電線が張り巡らさせ、子供たちが感電事故を起こすのです。呼吸器系の感染症の増加が懸念されているのです。





この難民キャンプのインフラ整備は、エルサレム市当局に責任がありますが、イスラエル当局のサボタージュで、不衛生極まりない状態に放置されているのです。

今日のお昼ご飯は、10月に札幌に招いたアフメド看護師さんの自宅に招待されました。マクウルーバというパレスチナの伝統料理を床に車座になっていただく・・・これもパレスチナの歴史を理解するうえでも大切なことなのです。

## ■ 11月10日(金) 8日目

本日は、待望?のビリン村へ・・・。  
午前8時に宿舎を出発し、ラマラ経由でビリン村へ到着しました。今日は金曜日、イスラム世界の礼拝日であり、普段は賑やかなパレスチナ自治政府のあるラマラの中心地も閑散としています。

ビリン村に着くと毎年のようにハイサム宅へ到着、出迎えてくれたハイサム家族と1年ぶりの挨拶を交換し、早速ハイサム氏からガザやヨルダン川西岸の状況について意見交換を行いました。

特に、イスラム教、ユダヤ教、キリスト教の3つの「平和的共存」を訴えるハイサム氏の熱弁を聴きながら、分離壁の設置や「入植活動」・暴力を続けるイスラエルに心の底から怒りが湧いてくるのでした。

12時過ぎ、金曜の礼拝が終了後、「国際的平和行進」が始まりました。その先頭近くに位置した私たちは、必然的に抗議対象である「分離壁」近くにいました。

ここで、以前から「奉仕団」の活動に関心を示し、連絡のあった京都大学2回生の岡崎さんが合流しました。

これで、今回の日本人参加者は7人目



となったのです。

顔を布で覆った若ものたちが、分離壁をよじ登り入植地内部に入り「ここからテルアビブへ向かうのだ・・・」と叫びながら抗議行動を続けていました。

遠くから見ていたイスラエル兵が、突然「分離壁」に設置してある「出入り口」から出現・・・。。若者たちは、一斉に退避しましたが、先頭集団いた私達、特にわたしの横を歩いていた岡崎さんの左側に催涙弾が撃ち込まれてきました。

私の目の前で、白煙が噴き出しそれ巻き込まれた私達は、流涙と呼吸困難に見舞われ、後方に退去せざるをえませんでした。

現地人でない、国際デモの参加者をめがけて「催涙弾」を撃ち込んできたイスラエルの卑劣なやり方に呼吸困難に耐えながら自分の心の中にイスラエルへの怒りを感じざるをえませんでした。



「車いすのラニー」さん宅に寄り、ラニー氏の診察とともに、落合作業療法士によるリハビリ指導を行いました。銃創による脊髄損傷と左頭部硬膜外血腫による脊柱の後側弯の矯正と右肩手症候群への運動療法を教えたのです。奥様だけでは困難ですので、同席していただいとこさんから協力をえる事ができました。

また、以前からあった下肢の褥瘡もきれいに治り、札幌から持参した褥瘡治療剤料は、褥瘡に悩むヘブロン在住のラニー氏の友人へ届けることにしました。

その後、ハイサム宅で昼食のお世話になり、ビリン村を後にしました・・・互いに抱擁を介しながら、来年の再会を約束して・・・。

西岸で最も厳しいといわれる「カランダディア検問所」を通り抜け、エルサレム

に着いたのが、17:00でした。すでに迎えに来てくれたサリム先生と息子さんのモハンマド医師の車に分乗してバーベキューを用意しているサリム宅へ・・・日本の大好きな御家族が皆集合し、和やかなひと時を過ごさせていただきました。

この時のお話で、来年11月に西岸に来る時の課題として

①屋内バレーボールが出来る施設を作ること。

②難民キャンプ内外に訴えて、サリム先生と私で「パレスチナと沖縄」についての講演会を開催する事が確認されました。

①は、子供支援活動を継続・発展させる基礎となります。

②は、ともにパレスチナはイスラエルにより、沖縄は米軍の抑圧により共に民族自決や人権侵害が継続されている国と地域です。

双方の理解の深化と連帯は、これらの課題を国際化し、解決へ力になる可能性があるのです。

さて、明日は、「世界歴史遺産」に登録されたにも関わらず、UNICEFからアメリカとイスラエルの脱退騒ぎとなっているヘブロン行です。

また、齋藤さん、細川さん、クインさんが来年の再訪を約束して、先に帰国の途に就くのです。本当にお疲れさまでした！！！！

## ■ 11月11日(土) 9日目

本日は、ヨルダン川西岸南部の中心都市ヘブロンへ・・・ガリコ美恵子さんの案内で、テルアビブに留学中である京都大学2回生の岡崎さんも同行してくれました。アラビア語の堪能な岡崎さんは今日の「在宅医療」で通訳のみならず「医療奉仕団」としての活動を手伝ってくれました。

ヘブロンは、そもそも緊張の強いパレスチナの街です。人口は40万人のパレスチナ人に対して500人程度の入植者が入植地を建設して入り込んでいます。

その入植者を守るために多くのイスラエル兵がパレスチナ人へ銃口を向けているのです。その理由は、ユダヤ人入植者がお祈りに行くために「安全対策をとる」とのことでした。

そうしたイスラエル兵の監視が続く旧市街とシュハダ通りへ……。が通行停止を行っているではありませんか。

過激な入植者が多いヘブロンでは、こうした道路の閉鎖は日常茶飯の様です。

こうして、イスラエル人によりパレスチナ人への監視は、昨年よりも厳しさを増している様でした。

さて、シュハダ通りへ入っても状況は変わらず、イスラエル兵にまもられたユダヤ人たちが、通りを闊歩しています。

ようやく、イッサ・アムロ氏が率いるYAS (Young Against Settlement)

の事務所へ……。そこでも14～15人のイスラエル兵が、礼拝に行く「入植者」を護衛しているのです。

この事務所には大学生が常駐。本日は、スエーデンからボランティアで来ている女子医学生も支援に来ていました。京都大学の岡崎さんとお話しが弾み、心温まる光景でした。



これは、まさに国際交流です。困難な平和主義的活動を進めるイッサの下にいつも海外からのお手伝いや視察グループが訪問しています。

軍事的な力が弱いパレスチナでのイスラエルの横暴・弾圧・抑圧が続くパレスチナでは、そうした事を許さないため「国際支援活動」の大切さをひしひしと感じるのです。

その後、シュハダ通りを出て、旧市街のツレーハ女史の家に立ち寄ったところ、親戚への往診の依頼がありました。同じヘブロン市内なので「在宅医療」の一環として受けることにしました。

行ってみると、予想通り脳性マヒの21歳と23歳の若者たちが、私達の訪問を待っていました。

さっそく、診察後落合さんによる運動療法がその場で開始されました。20～30施術を御家族に覚えていただき、1年後の再診に備えました。

## ■ 11月12日(日) 10日目

本日は、日曜日です……。シュファット難民キャンプクリニックの診療はお休みです……。その代り、同キャンプ内にある福祉協会附属チャリタブルセンターで無料検診を実施しました。

出勤には、厳重な警備が続く検問所を通らなければなりません。エルサレムに入る側では、乗客がバスから降ろされて、一人ひとり、IDのチェックを行われて

いたのです。

また、キャンプ内では相変わらずごみが散乱し、不衛生極まりない環境下で難民の暮らしが強いられているのです。

受信者の殆どが腰痛・膝・肩こりの患者さんでした。診断の後、ラベバ理学療法士が落合さんとともに一人ひとりの患者さんに「運動療法」を教えていました。ちなみにラベバ理学療法士は、来年には札幌に招いて運動療法の研修を受ける可能性が出てきたことは大変喜ばしいこと



でした。

内反膝(O脚)の女性には、札幌の田村義肢装具製作所から提供された「外側楔状足底板」を提供し効果を得ることができました……。感謝です。

今日も京都大学2回生の岡崎さんが通訳を兼ねて私達の診療活動に参加してくれました。堪能な語学はもとより、患者さんへの温かい眼差しや常に患者さんの斜め後ろに立ち、患者さんの万が一に備えている事の様子は、「医療従事者」への素質十分と見ましたが……。残念?ながら、彼は経済学部だったのです。しかし、その誠実な人柄を生かして、「思いやり深い経済学者」となって再会することを心から願うのでした。

また、チャリタブルセンターの別室では、健常な子供と障害児が一緒になって合唱を行っていました。指導者が作曲した曲に子供たちがその場で作詞を行っていました。その内容は、「離壁に反対!いつまでも平和の中で一緒に暮らしたい」という内容でした。

昼食後、サリム先生の運転で、旧市街が一望できる「オリーブ」山へ……。

その近くには、10月に札幌に来たモハンマド医師が研修していたマカサド病院がありました。ここは、パレスチナ自





岩のドーム

自治政府が運営する「パレスチナ人の病院」なのです。来年の「支援活動」時には、ここへの訪問し院長らと意見交換する予定となりました。

オリブ山からの眺めは、エルサレム旧市街が一望でき、その中には、イスラム教の聖地「岩のドーム」が金色に光っているのです。

## ■ 11月13日(月) 11日目

本日で、東エルサレム・シュファット難民キャンプでの診療は最終回です。

今日も検問所の出入りに気を使い、検問所を通る車で混雑していました。

ゴミ溜め場所の生活ごみが溢れだし、異様なにおいを発していました。この環境汚染も「難民キャンプ」へのインフラから手を抜き、「人が住めなくなる」事を狙っているイスラエルの「予定の行動」ではないかと思えます。

診療では、相変わらず、腰痛、膝痛の患者さんが多いのですが……

1 昨年12月2日にイスラエル軍の侵攻があり、その時左目を撃たれ、頭蓋硬膜内血腫にもなった17歳の少年がやってきました。勿論左目は義眼なのです。2年後の今でも頭痛・めまい・眼痛が続き、まともな生活が送れません。



イスラエル軍の射撃は、目に狙いを定め殺さずとも不自由に生活せざるを得ない状況にパレスチナ人を押し込むのです。

また、特徴的だったのは重症筋無力症に合併した脊柱側弯症でした。手術をするのであれば、パレスチナではできないので、日本への希望を出されました。

データーを持ち帰って札幌で相談することとしました。

診療が12時を過ぎたころ「大音響爆弾」が診療所の近くに落とされました。

職員の皆さんは、口々に「イスラエル兵の仕業」だとつぶやいていました。

12:30を過ぎた頃、難民キャンプの奥までイスラエル兵がなだれ込んできました。患者さんを落合さんに頼んで、愛用のカメラであるCANON 7D Mark IIを手で診療所から飛び出して、キャンプの入り口方面に向かいました。

自動小銃を肩から下げた完全武装のイスラエル兵が30名以上、キャンプのメインストリートを「戦争ごっこ」みたいな恰好をして、キャンプの住民を威嚇していたのです。

そのうち、診療所の向かいにある男子中学校へ武装兵士が突入して行くではありませんか。その理由は、ここの生徒がイスラエル軍へ投石した事とその口実であったようでした。

これらの様子を診療所の屋上から見ると……

走って逃げ帰えろとする中学生に対して、ネットの合間からイスラエル兵が水平撃ちを始めたのです。こうなるとけが人が出るどころか死亡する人が出て



不思議ではありません。

診療所の屋上とはいえ、決して安全とはいえず、看護師さんに写真撮影の

危険さを指摘されたのでした。

シュファット難民キャンプでは、こうした出来事がほぼ毎日どこかで起きているとのことでした。

昨日のヘブロンでのイスラエル兵の発砲により少年が傷ついたことなど、西岸全体でイスラエルの横暴さが強化されているように感じています。

このイスラエルの侵攻が下火になったころ、スコットランドから来ているソーシャルワーカーのゲイノールさんとともにサリーム先生の運転でエルサレム郊外のアボカリアにあるベドウィン集落の「無料検診」に出かけました。この「無料検診」は、サリーム先生が以前から行っている完全なボランティアワークなのです。人口は3家族で150名という比較



的大きな集落でした。

砂漠の遊牧民であるベドウインの人たちは、本来彼らが生活の糧としていた遊牧の土地がイスラエルの入植政策で分断されているのです。それだけでなく、入植地の拡大を狙っているイスラエルは、様々な嫌がらせや時には武力をもってベドウィン集落を壊滅させようとしています。

この集落の丘の頂には、「入植地」があり接近すると銃撃されるということでした。

さて、明日は朝からムラド薬剤師さんの案内で、西岸のパレスチナ自治政府のあるラマラから北部のジェニンへと足を延ばす予定です。

## ■ 11月14日(火) 12日目

本日は、ムラド薬剤師さんの案内でヨルダン川西岸の最北部にあるジェニンと

その周辺の「状況」を視察です。これまで、エルサレムからヘブロンへと南部の視察が多くあったので、今回は北部の変化を実際に感じる事が目的でした。

パレスチナ自治政府の首都であるラマラでムラドさんと待ち合わせ、その後は彼の運転するドイツ・チェコ製の乗用車スコーダで出発でした。

ところがラマラを出ようとすると即座にイスラエルの検問所があり、そこを通過するために渋滞に巻き込まれるのでした。首都ラマラを出入りする車をチェックする検問所はラマラを取り巻く形で10か所以上あるのです。何かあれば、イスラエルが検問所を閉鎖し、ラマラへの出入りを極端に制限する・・・これ自体、パレスチナ人の「移動の自由」を制限する人権侵害なのですが、私が最も気になったのは、患者さんの移動の自由も同じく制限されていることです。事実検問所での通過妨害により手当が手遅れになったり、死亡する例があり、イスラエルにいるパレスチナ人への「抑圧・弾圧政策」の一環なのです。

ヨルダン川西岸の北部は、海拔がゼロに近い地方が多く、夏は高温・多湿ですが冬は温暖な地域です。道路の両側には畑が延々と続くところがあります。

しかし、西岸全体はもとよりこの地域でも野菜の80%はイスラエル産、20%がパレスチナ産となっているのです。イスラエルの「押し売り」とパレスチナへの「産業抑圧」がこうしたアンバランスを作りだしているのかも知れません。

一方、小高い山の間を縫うようにして車を走らせていると、国際法違反の「入植地」とイスラエルの軍事基地がセットになっていることがあります。ということは、「入植地」を守るために軍事基地があるという事がよくわかります。そして、空にはヘリコプターが飛んでいるのです。

また、不当にも多数作られている「入植地」を結ぶ道路もパレスチナ人の土地を平気で分断する形で建設されてしまう

のです。

しかも、これらの「入植地」は、山の上に作られ下に位置するパレスチナ人の集落を見下ろす形になっています。更に深刻なことは、高いところにある「入植地」からの下水など排泄物は下方にあるパレスチナ人の土地に「放出」される事があるのです。

さて、いよいよジェニンの街に入ります。4年まえに一度訪問しましたが、その時の思い出とともに、中心街や旧市街地を行くと新しいビルの建設など「発展」を感じました。かなり人出が多いと感じましたが、「土曜日などは大変な混みよ



うです」とムラドさんが言っていました。

ジェニンと言えば2002年4月1日から11日にわたりイスラエル軍による「ジェニンの虐殺」で知られた街です。その現場となったジェニン難民キャンプにも足をのびました。ここは、1キロ平方メートルの広さの中に当時2機のアパッチヘリと30台の戦車で「侵攻」がおこなわれ、500人のパレスチナ人が虐殺されたのです。(イスラエル兵の死者は23人)

このジェニンから北に5km行くと西岸とイスラエル間を決めた「グリーンライン」があるのです。そこにも厳重なジャラマ(JALAMAH)検問所があるのです。車で走ると高々5~6分しかかかりません。まさにヨルダン川西岸の北端にあたるのです。これで、ガザ地区の南端、エジプトとの国境にあるラファともにパレスチナの南北をこの目で見る事ができました。しかし、パレスチナを十分理解するためにはまだまだ視察しなければならぬところが数多くあるのです。支援活動とともに私達の取り組みの大切な柱な

のです。

時間の過ぎるのが早く、14:00に帰路に向いましたが、ここもあちらこちらに「検問所」を通り抜けなければなりません・・・。

ラマラに戻り、ムラドさんに別れを惜しみ路線バスでエルサレムに向いました。しかし、これからが大変!!!!あの西岸で最も厳しいカランディア検問所を抜けるのに車の大渋滞なのです。「検問所」を抜けるのに、実に1時間30分もかかるのでした。前記したように、病人への被害や経済活動への負の影響などありますが、これを繰り返されるパレスチナ人にとっては、あらゆる面で「真綿で頸を締められる」様なものなのです。

20:00過ぎにやっと宿舎に戻ることができました。そこには、サリム先生ご夫妻とスコットランド出身のゲイノールさんが笑顔で迎えてくれました。

17:00の約束でしたので、実に3時間も待たせたことになるのです。にもかかわらず、笑顔を決さず打ち合わせの後に早くゆっくり休むようにとの言葉をいただきました・・・本当に思いやりを感じさせられました・・・見習わなければと痛感させられました。

## ■ 11月15日(水) 13日目

今日は、パレスチナの「独立宣言日」として、国民的休日なのですが・・・

1988年11月15日に宣言された「パレスチナ民族評議会によるパレスチナ国の宣言」を承認して採決され、更に「パレスチナという名称が国際連合体制でパレスチナ解放機構という名称の枠内で用いるべきである」とも決議された日なのですが・・・。

しかし、1993年の「オスロ合意」以降、ヨルダン川西岸でのイスラエルによる「入植地」と分離壁の建設、2007年以降のガザ地区「完全封鎖」が行われている現実をみると、とても「独立」などとは





バティール村

いえない状態なのは、これまで述べてきた通りなのです。従って、多くのパレスチナ人は、仕事は休みですが単純に「独立」を祝う気にはなれないのがほとんどです。

朝から、サリム先生の案内で、エルサレムやベツレヘム郊外のイスラエルによる「入植地」視察やパレスチナの歴史をローマ時代までさかのぼることにしました。

目指すは、エルサレムとベツレヘムの郊外にあるバティール村でした。

途中、エルサレムを郊外に抜ける幹線の両側は「入植地」だらけ、山の頂上に同じ型の家が密集していれば「入植地」なのです。

行く途中、バティール村の手前で、パレスチナ人同士が土地の所有をめぐる「投石」事件を起こしていました。イスラエルからの「弾圧と抑圧」が日々強まる中、パレスチナ人社会の中にも相当な不満がたまり、小さな出来事が発火点となり「衝突」が起きるのです。救いだったのは、地域の長老たちが仲裁に入って解決に向いそうなことでした。

バティール村は 1000 年以上前、ローマ時代にできた棚田やそれを潤す泉でパレスチナの中でも歴史的な村なのです。

この村にもパレスチナの「侵略」が及んでいます。まず、この溪谷にテルアビ

ブ～西エルサレム間をつなぐ鉄道を敷設しすでに電車が走っていました。

イスラエルは、そのみならず、鉄路に沿って「分離壁」の建設を準備しています。そして、24 時間体制でイスラエル兵が村を監視しているのです。

これに対して、UNESCO や UNICEF が、世界遺産に登録過程でイスラエルが激しく抗議しているのです。(UNICEF がパレスチナ・ヘブロン旧市街を世界遺産の登録するとアメリカとイスラエルが脱退したのはつい最近でした)

棚田に泉から湧き出てしみ込んで行き、それが潤う農地では見事な農産物が育っているのです。これがローマ時代からつついているのですから・・・本当に歴史を感じる村でした。

こうして「世界遺産」になり、現在も活用されているローマ時代からの遺跡でさえも破壊し、「入植地」建設の対象にしてしまうイスラエルの横暴が現在進行形で存在しているのです。

一方、昼食をいただいたサリム先生の娘さんの隣に住む青年をインタビューし「健康相談」を受けることになりました。



その 34 歳の青年は、2000 年に始まったインティファダ後、抵抗運動の「罪」で 2004 年に 21 歳でイスラエル軍に逮捕・投獄され、それ以後今年の 4 月に釈放されるまでの 13 年間牢獄につながれていたのです。

現在、腰痛・背部痛を訴えていましたが、それ以上に深刻だったのは、13 年間に受けた牢獄での聞くに堪えない精神までも破壊する様々な拷問と牢獄生活でした。18 時間から長ければ 3 日間の「不眠の強制」、吊り下げ、「光や音の強制」・・・様々な牢獄を移動させられる・・・こうしたことが 13 年間も続けられるのです。そのうちに大腸癌にまで侵されたのです。

私の診察の結果、腰痛体操を指導したのですが・・・彼の 13 年間を思うと目頭が熱くなるのです。イスラエルの「侵略と弾圧」への抗議とパレスチナ人への励ましの気持ちがない交ぜのまま腹の底から燃え上ってくるのが分かりました。そして、私の目にはわずかな涙が滲んでくるのです。

帰りには気持ちを取りなおして、東エルサレムの郵便局から支援していただいている皆様に、感謝の気持ちとパレスチナへの思いを記した絵葉書を送りました。

さて・・・明日から 19 日まで、今期の二回目のガザ「入国」(GAZA 2)です。



# リハビリテーション支援

落合裕昭(作業療法士)

## 訪問のきっかけ

私がこのパレスチナ医療奉仕団活動に興味を持ち入会したのは、平成28年に行われた第7回医療奉仕団活動の報告集会で、猫塚先生が脳性麻痺（Cerebral palsy：以下CPとする）の診察と指導を行われていたスライドを見たのがきっかけでした。私は昭和50年以来、CPを中心に肢体不自由児・者のリハビリテーション（以下リハビリとする）を行っていたことから、その子がパレスチナどのようなリハビリを受け、又どのような生活しているのが興味関心を持ち、その報告集会后、猫塚先生にCPのリハビリ支援を希望し参加することになりました。

## リハビリの認知度

昭和45年、私が東京の清瀬リハ学院2年の時、学生自治会の主催でリハビリの認知度について新宿駅前中心に街頭アンケートを行ったことがあります。その当時リハビリの言葉を知っていた人たちは2～3割程度の人で、専門職種の理学療法士（physical therapist）のPTや作業療法士（occupational therapist）のOTの認知度は少なく、特にOTに至っては知っている方はほとんどいませんでした。

今回、パレスチナでどれだけ「リハビリ」が認知されているか関心がありましたが、アンケートなどで確認する機会もありませんでしたので正確な状況は分かりませんでした。

訪問期間中、多数の支援者や当事者の方にお会いし名刺交換を行いました。中東諸国の中でもパレスチナは文化度が

高いと言われているだけあり誰一人としてOTの名称を知らない人はいませんでした。

只、唯一ガザの国連職員が笑顔で「占領指導者」ですかと猫塚先生の通訳で聞かれたときはさすがに驚きました。まさか国連職員がOTを知らないのかと不思議に思いましたが、ガザではイスラエル軍をIOF（Israeli Occupation Force）イスラエル占領軍と呼ばれています。Occupational TherapistをこのOccupation（占領）にもじり、冗談話にしながら挨拶をされていたようです。日常の挨拶の中にもガザの現状そのものが話題になっていることには衝撃を受けました。

## リハビリ支援

今回のリハビリ支援は、ガザの市内のリマールクリニックとヨルダン川西岸地区のエルサレム市内にあるシュファット難民キャンプの2か所を中心に、その他、ベドウインの遊牧民集落とヘブロンの人宅で行いました。

支援の拠点となった2ヶ所のリハビリ対象者は共に整形疾患が多く治療は個室での温熱療法や電気治療が中心に行われていました。

シュファット難民キャンプでは経済的理由かどうか分かりませんが、一人ずつ



リマールクリニック



治療が終わるたびにロールペーパーを取り換え、シート代わりに利用されていました。このことから静的な治療方法が主体に行われていることが推測されました。日本のリハビリ施設で一般的に行われているプラットホーム上での全身を動かす運動療法は見受けられませんでした。

リハビリ支援の主な疾患は腰痛や膝痛・頸痛と肩の痛みを主訴とする整形疾患で運動療法を中心にリハビリ支援を行いました。

痛みの原因は皆さんの運動不足と体重増加による身体的負担が主要因と見受けられました。

特にパレスチナ女性は学校を卒業すると結婚し家庭に入り運動する機会が少なくなると言われています。ラジオ体操などの全身を動かす習慣もないことから、どうしても体を動かす機会がなく無理に仕事などを行うことで体を壊す結果に繋がっているように思われました。

肩の痛みを訴える方に、肩回りの運動療法を指導しましたが、自発的に肩を上下と前方に動かすことはできても、後方に動かすことが全くできない人が数人いました。後方に動かす筋肉が麻痺をして





動かさないのであれば理解できますが、麻痺がなく後方だけ動かさえない方を見るのは、長年リハビリを行って来て初めての事でした。

只、肩回りを全方向に動かした経験がなく、動かす感覚が分からないだけで、動かし方を指導すると徐々に動かせるようになり皆さんが全方向の動きができるようになりました。麻痺性の障害がないことから肩の全方向の動きができるようになると、リラクゼーションの感覚が分かり、痛みも軽減し喜んでクリニックを後にしてくれました。

### 健康維持の為に生活習慣の改善を

改めて日本で普及しているラジオ体操などでの全身運動の必要性和重要性を再確認させられました。各地を移動する中で目を引いたのが肩の痛みや腰痛の原因になりそうな横抱きでの子育て方法でした。

抱っこ紐などを使用する習慣がなく、外出時に赤ん坊はもちろん2歳くらいのお子さんでも必ず横抱きをされていました。さらに妊婦さんでも横抱きをしながら外出されていたのには驚かされました。



さすがにこれでは肩や腰を痛めてしまいます。お国柄もあり、簡単に生活習慣を変えていくのは難しい課題があるかと

思いますが、運動療法の前に健康維持のため、生活習慣の改善が必要だと思われました。

### C Pのハビリテーション（療育）

後天的な疾患は元の健康状態に回復することを目的にリハビリテーション (Rehabilitation) が行われます。

このリハビリテーションの用語は国際的に知られ、知らない人はいません。只、C Pのお子さんなどは生まれた時から疾患を抱えていますので元の状態に戻す「Re」ではなく発達能力を引き出すハビリテーション (Habilitation) が行なわれます。

北欧などは、子ども達の発達を促す支援センターの名称はハビリテーションセンター (Habilitation Center) が一般的に使用されています。まだ日本ではこの言葉は余りなじみがありませんが、同じ意味合いで「療育」の言葉が使われ、C Pのお子さんを支援する臨床場面では古くから使用され定着しています。

今回、C Pの療育指導を行ったのはガザのリマールクリニックの1名とヘブロンで在宅指導を行った姉弟2名でした。

### ガザの事例

ガザのケースは下半身に主な障害がある両麻痺のC Pで、短下肢装具を着け平行棒で歩行訓練をしている様子を見た時は痙性が強く、足部も内反尖足位の変形が推測されましたが、いざ療育を行っていくと全く違う足部の姿勢パターンが見られたのは驚かされました。両麻痺であれば下肢痙性による内反尖足パターンが

ガザのケース



一般的に見られますが、このケースは下肢痙性がありながら外反背屈の逆パターンをとっていました。

一瞬C Pなのかと疑問を持ちながら療育を行いました。診断はC Pとのこと！！ ケニアでもこのような症状を示す症例があることを、JAIC研修報告会で聞いたことがあります。中東やアフリカでは教科書にない新しいC Pタイプが有るのかと疑問を持ちながら暫くの間、療育を行いました。

リーマクリニックのムタツ (PT) さんとお父さんにも療育方法を伝えながら、短時間でしたが療育指導を行いました。終了後はリラックスした様子で、笑顔を見せお別れをしてくれました。

### ヘブロンの事例

ヘブロンの在宅ケース



ヘブロンのケースは16人兄弟中、21才の男性と23歳の女性でした。二人とも2歳までは何も支障なく普通に暮らしていたと話されていましたが、明らかに黄疸によるアテトーゼタイプ (不随意運動型) のC Pと思われました。二人とも出産した翌日に退院したとのことでしたので、恐らく1週間後から出てくる黄疸の処置が十分にできなかったことで、C Pになったのではと推察されました。

国内でも以前は黄疸によるアテトーゼは少なくありませんでしたが、今では産科医療が進み、アテトーゼタイプのC Pは見られなくなり、もし黄疸の原因でのC Pであれば医療サイドの責任問題にもなっています。パレスチナでの現在の出産時の産科医療がどのようになっているか分かりませんが、医療環境も課題



があるように感じました。

二人とも今まで療育を受けたことがないことから、足部を中心に二次的な変形が全身に見受けられました。最初は二人とも初めての経験から緊張した表情を見せていましたが、兄弟の方に療育方法を指導しながらゆっくりと全身を動かし緊張を抑制していくと二人ともリラックスし笑顔を見せてくれるようになりました。

21才の弟さんは徐々に体の動きに慣れると、私が療育中口癖にしている「そうーそうー」を連発し、笑顔で「やって、もっとやって！！」と意思表示をされていました。

### CPの療育環境

療育に関しては、ガザのケースのようにクリニックで指導を受けているは少なく、ヘブロンのケースのように何も療育指導を受けず在宅で生活されているのが一般的な印象を受けました。

今回、パレスチナの子供たちへの療育支援で一番関心があったのは在宅で障害当事者がどのような生活を送っているのか、家庭的・社会的な療育環境を知りたいと思いました。

日本では2年前の「やまゆり園事件」や、最近では寝屋川の餓死事件など、目を覆いたくなるような悲惨な事件が散見されましたが、このような非人道的な事件などがパレスチナで起きているのか？一見平和に見える日本でこのような悲惨な事件が起きているのに、混乱極まるパ

レスチナで障害者はどのような生活を送っているのか興味関心がありました。

現地の人達から、悲惨な事件について直接聞くこともできず、詳細は分かりませんでした。ただ、16人の子供を抱え大変な生活環境だったと推察されるこの家族を見る限り、家族全員の優しいまざしや兄弟の方の積極的な療育姿勢などから、障害を持った2人は決してつまはじきにされているのではなく、2人を中心にした生活が送られていた様子で、悲惨な状況はまったく想像することはできませんでした。

### アラブ思想と糸賀思想

日本でも、社会的に弱い立場の当事者を家族の中心に、さらに社会の中心に据えることの重要性は古くから提唱されてきました。日本の福祉の父と呼ばれる糸賀一雄氏は「この子らを世の光を」から「この子らを世の光に」を合言葉に、ど

のように障害が重くとも一人ひとりを大切にし、心豊かに日々の生活が送れることを理念に、昭和21年に近江学園、昭和38年にびわこ学園を設立されました。敗戦で日本社会が混乱している中、様々な困難を乗り越え、当事者中心の社会設立に向けた取り組みが実践されてきました。

それから一世紀を迎えようとしていますが、悲しいことに当事者を社会の中心にした理念が一般社会には、まだまだ根付いていないように思われます。

反面、社会的平穏とは程遠いヘブロンで出会ったこの一家族を見る限り、当事者を中心とした生活が営われ、糸賀氏が提唱した「この子らを世の光に」の理念が根付いているような印象を受けました。

パレスチナ医療奉仕団報告会で猫塚先生が良く「アラブの人たちは家族を大事にする」と話されていたが、家族の中の障害当事者をのけ者にするのでなく、家族一員として大事にした生活を目にした時はアラブ思想と糸賀思想の共通点を見る思いがしました。

ヘブロンの当事者2人とも家族の真ん中に居て、皆で支援がされているから、底抜けに明るい笑顔が見られたと思います。当事者の笑顔は正直なものです。

是非、今回の支援活動時にも同じ笑顔が見られることを期待しながら帰国しました。







# 第9次パレスチナ医療・子供支援活動報告

細川 佳之 (中学校教諭)

## 1. はじめに

私にとっては初めての医療子供支援活動でした。海外への旅行もほぼ初めてであり、全てのことが初めてといっても良いことばかりでした。北海道パレスチナ医療奉仕団のメンバーとして、エルサレムとガザ、そしてビリン村に行くことができました。11月2日に札幌を出発し、エルサレムで5泊、ガザでも3泊し、11月12日に帰りました。

テルアビブ空港に到着してから、西エルサレムに入り、東エルサレムのホテルに入りました。全体を通しての印象ですが、イスラエルは非常に近代的な建物がどんどん建てられているのに対して、パレスチナ人が多く住む東エルサレムは建物も古く、経済的にも大きな差があるということを実感しました。エルサレム旧市街は、まさにアラビアンナイトの世界でした。3つの宗教の聖地ということもあり、多くの観光客で賑わっていました。私は、かなり観光気分で見ていたのですが、そんな私の気持ちを一瞬で変えたのは、旧市街のすべての門に配備されている自動小銃を構えたイスラエル兵の存在でした。日本ではちょっと考えられない光景でした。私たち日本人に対しては特

に何があるわけではありませんが、パレスチナ人に対しては突然尋問が行われるという状態でした。とくに、若い男性に対してはかなり厳しい尋問が行われるようでした。旧市街の中でも、ユダヤの聖地である「嘆きの壁」へ行くには、私たちも検問所を通らなければならず、荷物検査、身体検査が行われました。このことは、このあと訪れたシュファット難民キャンプへの検問所やガザのエレッツ検問所でも同様でした。

## 2. スポーツ (バレーボール) 交流

### i 私が参加したきっかけ

今回私が第9次の支援活動に参加した理由は、子ども支援として「スポーツ交流」を行うということでした。前回の第8次支援の中で、このことは検討されており、その準備が行われていました。『戦争しか知らない子どもたち』の心のケアのための支援の一つとして、スポーツが考えられました。

私は、札幌市立の中学校に35年間教員として勤務してきました。同時に、バレーボール (主に女子チーム) の指導者として活動してきました。その経験を生かしてパレスチナの子ども達にバレー



【チャイルドセンターの入口】

ボールを教えてみないかという猫塚先生のお誘いを受けたのでした。とはいっても、パレスチナの現状も言葉では分かったような気分になっても、実際に行ってみなければ分からないというのが本当のところでした。まずは、現地調査ということで参加させてもらうことにしました。

### ii シュファット難民キャンプの中にあるチャイルドセンター

東エルサレムのシュファット難民キャンプの中にある「チャイルドセンター」を訪れました。ここは、子ども達が放課後の時間を過ごす場所です。ダンスや歌、Arts & Handmades、色々な活動ができる場所です。その中にスポーツもあります。とは言っても、バレーボールを行うにはスペースが狭すぎました。札幌から持って行ったソフトバレーボールを使って、まずはオーバーパスをやってみようという誘いでした。子ども達はバスを続けようと一生懸命です。しかし、いつの間にかサッカーになってしまいます。サッカーは世界中でもっともメジャーなスポーツなんだと実感しました。スペインのレアルマドリードやバルセロナの選手達の名前が子ども達の口から出てき



【ダマスカス門で通行人を監視するイスラエル兵】

ます。クリスティアーノ・ロナウドやメッシです。日本の選手は知っているかと聞くと、本田選手や香川選手の名前が出てきました。

1時間ほど一緒にバレーボールや卓球などをしましたが、ちょっと気になったのは、特定の男の子達がボールを独占して私と1対1でパスをしようと言ってきたり、小さな子を押しつけて、ボールに触らせないというような態度を取ることでした。こうしたことは日本でも見られることですが、私はこの男の子達の精神的な未熟さというか病んでいるような感じを持ったのです。

猫塚先生の話では、診療所のサリム先生がシュファット難民キャンプの中に「来年までには体育館を作りたい」と話していたこと聞きました。もしそれが実現したなら、素晴らしいことです。ぜひ、男の子達が何の気兼ねなくのびのびと、バレーボールを楽しむ姿が見られることを心から期待したいと思いました。

### iii ガザ市内の女子学校

エレッツ検問所から1.5kmの金網通路を通過して、『天井のない牢獄』に入りました。分離壁に囲まれて、上空からはアドバルーン（監視カメラ）で監視されています。パレスチナの人達は自由に行き来できないということを考えると、話には聞いていましたが、まさに牢獄です。

ガザへの入国許可をもらい、迎えに来てくれたUNRWAの車に乗り、本部へ向かいました。ここで、教育部門の責任者の方とバレーボールについて直接話し合うことが出来ました。ガザ市内の女子



【最後に記念撮影 この子たちの笑顔が何よりもうれしかった】

学校である「Al-Zaitoun Prep Girls B」で中学生12名にバレーボールを教えることになりました。ガザは子どもが本当に多いので、午前と午後に分かれて授業が行われていました。一つの校舎を1日に2つの学校が使用しているということです。このザイツーン女子学校は、ガザ市内でもとても進歩的な教育をしている所だそうで、ローラーブレードやモダンな音楽に合わせてダンスで大歓迎してくれました。

学校の校舎はとても立派ですが、屋内体育館というものはありません。床はコンクリート、天井には布を張って直射日光を防いでいる『体育館』がありました。

支柱が立てられ、ずいぶん高くネットが張られていますが、真ん中はダラーンと下がっています。選抜された12名がゲーム練習をしていました。なかなかラリーが続かず、まさにビギナーという言葉がぴったりでした。

使用しているボールはゴムのボールでJapan製KINGという名前が印字されていました。ゴム製ということでけっこう重いボールですので、なかなかパスやサーブといった基本プレーも難しいようでした。ここでも、まずはソフトバレーボールを使い、オーバーパスを1対1からはじめて、2対2と進めていきました。そうすることで、少しずつパスが続くようになっていきました。先生達も積極的で、一緒にパスをしたいと申し出てきました。さらに、3対3でネットはさ

んで簡単なパスゲームをやってみました。そう簡単にはいきませんでした。生徒達は本当に一生懸命にやってくれました。予定の1時間があっという間に過ぎました。

コート周りでも、生徒達が奉仕団の他のスタッフとバレーボールを楽しむ事が出来ました。

イスラム教の教えを守り、ヒジャブで髪を覆い、衣服で肌を見せない。当然、運動するときも同じです。暑くて大変だろうなと思いましたが、彼女達は楽しそうに活動していました。後で聞いた所によると、彼女達は、とても楽しかったと話していたということで、本当に良かったと思いました。

今回、UNRWA職員の吉田美紀さんが私の指導に付き合ってくれて、先生や生徒達に私の言葉を伝えてくれました。コミュニケーションがスポーツでもとても大切です。特にバレーボールではお互いの意思疎通が欠かせません。英語の勉強をしなければならぬと痛感しました。しかし、生徒達にはアラビア語でないといけなわけですから、流暢にアラビア語を話す齊藤育さんは凄いと改めて思いました。

### iv 今後のバレーボール交流のこと

今回の取り組みを行って、今後のことについて考えてみました。

まずは、ガザでの交流ですが、学校の体育の授業でもバレーボールが行われて



いるということなので、もっとも大切なのは指導者に対する『指導法』の提案のように感じました。同時に、施設やボールの整備です。とくに、ボールは重要です。今回は、ソフトバレーボールを持ち込みましたが、次回は本当のボールを何とか用意したいと思います。札幌市内の高校のバレーボール指導者に協力をお願いして、ボールを寄贈してもらうことを考えています。

子ども達との交流や直接の指導ももちろん大切ですが、バレーボールの楽しさはやはりゲームをすることであると思います。子ども達にモチベーションを持ってもらうためにも、ガザ市内での『大会』の開催をめざすのが良いと思いました。そんな思いをしていたときに、ガザ市内で「女子ソフトボール大会」が開かれたことをニュースで知りました。次回の活動では、ぜひともその大会について具体的に調査したいと思います。

まとめてみると次のようになるかと思っています。

#### 《今後の取り組み》

- ①指導者に対する指導法の提案
- ②子ども達に対する直接の指導
- ③ガザでの大会の開催に向けての準備
- ④ガザへバレーボールを送る取り組み
- ⑤その他

次に、シュファット難民キャンプでの交流ですが、ここでは何とか男の子達との交流を図っていきたいと思います。もちろんガザでも同じですが、なかなか自分達の将来が見えない焦りや絶望など彼らが抱えている問題は非常に大きいものがあります。それ故に投げやりになったり、暴力的な行動が目立ったり、さらには薬物などに手を染めていくといった現実があるようです。そんな子ども達に少しでも精神的な開放と健全な精神の育成に役立てることが出来るのなら良いと思います。実際の問題としては、施設の確保が大きいのですが、できることから子ども達との交流を図っていきたく思

います。サリム先生の言葉にも期待したいと思います。

### 3. 男の子の姿に見えるもの

ガザで出会った男の子の姿が非常に印象に残っています。

まずは、ガザに着いた日にUNRWAの車に乗り、本部へ向かう途中に出会った少年です。



この少年は、車が信号で停止した時間に車の窓ガラスを一生懸命に拭いて、報酬を得ようとしていました。実際にどれだけのお金を得ることが出来るのかは分かりませんでした。仕事がないのです。同じようなことは、2日目のガザ市内のアイスクリーム店に案内してもらった時にもありました。その少年たちは、お店を訪れる客へ風船を売ろうと懸命でした。かなり薄暗くなっていた時間帯のことでした。

さらに特徴的だったのが、診療所で出会った少年です。この子は、学校にも家庭の経済状態のために行けず、毎日のように診療所にいるのだそうです。我々が手形を平和のハトに見立てて、そこにメッセージを書いてもらう活動を行っているところに最初から最後までずっと付き合ってくれました。



しかし、彼の目的は、単なる奉仕活動ではなく、そこにあるのはやはり報酬な

のです。片付けの時に我々になにやら要求するのですが、私には彼が何を言いたかったのか分からないでいました。齊藤さんに聞くと、彼はお金を要求しているのだということです。それは、彼の置かれている厳しい現実なのだと思い知らされた気分でした。

ガザの中には大学もありますが、そこを出たからといっても非常に厳しい現実が待っています。ここは『天井のない牢獄』ですから、外へ出て仕事を見つける自由もありません。

イスラム社会では、多くの女性は高校を卒業すると家庭に入り、子どもを産みます。ガザも例外ではありません。男性が家庭を経済的に支えなくてはなりません。ところが、現実には若者の失業率が60%を超えるとも言われています。したがって、大学を出ても就職できず、ガザの中では将来に希望を見いだせないと感じている若者が多く、近年では、若者の自殺も増加しています。こうした現実の中で、人口の8割の人が支援に頼らざるを得ない状況にあるというも頷けます。

### 4. 私にできることを

支援活動で私は何が出来るだろうか。パレスチナから戻ってきて、考えることはこのことです。

非常に厳しい現実の中でもパレスチナの子供達には、とても明るい笑顔で私達の活動に応じてくれました。まずは、この笑顔をなくさせたくないということが一番です。ガザでは外国人をあまり見ることがないので、子ども達はもの珍しさも手伝って親しげに近寄ってきてくれます。閉ざされた空間の中で、私達と出会うこと自体が彼ら、彼女達に何かの刺激を与えられるのだと思います。ですから、とにかく現地に足を運ぶこと自体が支援になると思います。

もう一つ、こちらに戻ってからの支援活動の大切さです。非常に貴重な経験をしてきたのですから、それをたくさんの





【ガザ市内「リマール女子学校」 たくさん子どもたちが見送ってくれた】

人達に知ってもらうことです。私の活動は、まだまだ狭い範囲でのものですが、まずは自分の足下からです。私の勤務している中学校で、先生達や生徒達へ活動の報告をさせてもらいました。

また、新聞の力も大きなもので、私の活動を知った札幌市内のバレーボール関係者からたくさん声をかけてもらいまし

た。高校の先生方にも今後の協力をお願いしています。多くの人から、自分にはできないことだけど、頑張してほしいと励ましの言葉をいただきました。知らせることが力になると思います。

パレスチナという多くの人が「宗教的な対立」という見方をしています。私もそんな考え方を持っていたのですが、

現地に行ってみてそれが間違いだと感じました。パレスチナ問題（イスラエル問題といった方が良いのかも知れない）は極めて政治的で、人間の尊厳に関わる問題なのだと思います。このことも多くの方に知ってもらいたいことです。

## 5. おわりに

多くの方々の協力を得て、私の支援活動への参加が実現できました。心から感謝したいと思います。もちろんそれは、私の家族に対してもです。本当にありがたいことだと思います。

今年（2018年）5月15日のアメリカ大使館のエルサレムへの移転を前後して、大変な状態が続いています。今年の支援活動がどのような形で実現できるかは微妙な所ですが、昨年の活動を継続させることができるように全力を尽くしたいと思います。今後とも多くの方々のご支援をお願いします。





# 第9次パレスチナ 医療・子ども支援報告

齋藤 育（特別支援学校教諭）

## 1. はじめに

このパレスチナ医療・子ども支援の活動も私にとって3回目を迎えることとなりました。これまでの活動では、まずは自分の活動を確立すること、目の前に映るパレスチナやそこに住む人々の様子をただ漠然と見て、感じて、考えることが自分の目的でした。しかし、今回で3回目を迎えるにあたり、過去の2回は異なった目的をもって参加することができました。子ども支援活動においては、現地の学校や幼稚園の雰囲気分かっていることでより主体的に、また、現地の先生方を巻き込んでの活動となることを意識し、パレスチナそのものに対する見方は、3年という月日の流れを通して見えてくる、普遍的なもの、変化が感じられたもの、というところに着眼点を置いて見てくることができました。

## 2. 平和への壁画活動

### (i) 日本の学校との交流

平和への壁画活動は、今年で3年目を迎えました。パレスチナの平和を願ったメッセージが書かれた手形を鳩に見立て、パレスチナ内の診療所に飾るというものです。私がこの活動で目指していることは、診療所に来る患者さんや子どもたちに楽しいひと時を過ごしてもらおうこと、壁画を見て少しでも辛い現実を忘れてもらえるような気持ちになってもらうこと、また、遠い日本からもパレスチナのことを思っているという気持ちを現地の人々に感じてもらえればと思い取り組んでいる活動です。この活動を行うにあたり、毎回、パレスチナを応援してく

ださる方々に協力していただき、パレスチナへ届ける手形を集めていますが、今年はさらに札幌市内の中学校の先生の協力や私の勤める学校の協力のもと、それぞれの学校の児童生徒の手形もたくさん持っていくことができました。学校という教育現場の中で、パレスチナのことについて伝え、そして、多くの子供たちがパレスチナに関心を持ち、この手形の作成に携わってくれました。色とりどりでデザイン性にあふれる作品がたくさんあり、壁面装飾を見てくれた人々は日本の子供たちの作品にとっても感心していました。

### (ii) 活動を通して見えてくるもの1 ～シャファアット難民キャンプ～

東エルサレムでは、シャファアット難民キャンプ内にある診療所で活動しました。この診療所で壁面装飾を行うのも3年目となりました。ここでの活動でとてもうれしかったことは昨年制作した装飾が残されていたことです。1年前のものでしたので、一部欠けたりなどして劣化こそはしていましたが、残っていたことに感激しました。そして、また新たに診療所に来た方やその家族に活動に参加してもらい、今年もたくさんの鳩に見立てた手形を壁面に飛ばして行くことができました。私にとってこの活動の楽しみは、参加してくれる人たちと一緒に手形の作品づくりをすることはもちろんのことですが、現地で生活する人々と話をし、生の声を聴くことも大きな楽しみの一つでもあります。この何気ない世間話の中で感じ、考えさせられることがたくさんあり

ます。今回の話の中で改めて感じさせられたことは、難民とは何かということでした。難民キャンプの中に生活をする人にも富裕層と貧困層があり、中には毎年海外旅行をしている人がおり、一方ではその日の食事外部からの支援に頼りながら生活をしている人がいます。旅行の話をしてくれた方はとても生き生きと話をしてくれましたが、周りの目もあるからか周囲の人には聞こえないような声のトーンで話していました。どちらも難民の方々なので故郷を追われ、日タイスラエル軍による嫌がらせを受け、苦しい生活を送っているのは同じです。難民だからと言って裕福になってはいけないうか、難民の暮らしとはなんなのか、改めて考えさせられることとなりました。また、話をしているとかなりの確率で「結婚はしているのか？子供はいるのか？」と聞かれます。そして、一人だと答えるとみんな口々に「いいわね、いいわね」といいます。もちろん子供がいる生活は幸せだけれども、家族に縛られないで自由なのがうらやましい。と冗談交じりに言われます。そして、さらに一部の人からは早くに結婚をしないで、勉強をしたかったという話も聞きます。女性の人権や権利は少しずつ認められてきてはいますが、文化的な慣習や、貧困が理由で多くの女性が20歳前後で結婚、出産をするという状況が今なお続いています。それを悲観したり、別の道もあったのではないかと自問する女性が声を上げ始めたりしており、女性の考え方の変化の表れを感じました。

### (iii) 活動を通して見えてくるもの2 ～リマール難民キャンプ～

ガザでは、リマール難民キャンプ内にある診療所で活動しました。ここでの活動は2年目になります。そして、ここでは平和への壁面装飾活動の裏で考えさせられることがたくさんありました。特に考えさせられたのは、支援の在り方です。私は個人的にこの支援活動の中で、一個人にものやお金をあげたりはしないと決めています。これまでたくさんの人たちにお金や物を要求されてきましたが、あげてきませんでした。ここでは、11歳のバラア君という一人の男の子と出会いました。難民認定をされるとパレスチナ難民救済機構、通称UNRWAが教育を無償で提供してくれ、教育を受ける義務がありますが、彼は学校へは行っていませんでした。それは、彼の家族がその日暮らす生活がやっとの状態で、文房具も、服も買えない最貧困の状態にあるからということでした。彼はこの活動中、最初から最後まで私のそばを離れませんでした。そして、時折、大人が周りにいない状況の時に小さな声でお金を要求してきました。たまたま周りの大人に聞かれていたり、私の困っている状況を察知した大人たちはそれぞれの考えで彼に対応し、ある大人はかわいそうだからお金をやってやれと私に言い、ある大人は怒って帰れと言い、ある大人は自分が手にしているお菓子を自ら与えたりしました。私はこうした反応をする大人には必ず、私がここにきている意味やお金を渡さない意味を伝えるようにし、それを聞いたほとんどの人が私の考えに理解を示してくれます。そして、何度も彼にはお金は上げられないと説明しましたが、彼は最後まで私のそばを離れず、活動に参加する子どもたちと一緒に遊び、時には先生として手順を説明したり、手形を壁面に貼る仕事を手伝ってくれたりしました。そして、最後までお金を渡すことはしませんでした。その時に持っていた飴を数個とペットボトルに入った水をあげて

別れました。たったの飴数個と水だけかもしれませんが、自分の中では渡しているのか葛藤をし、わたしが支援活動を行って来て初めて一個人にものを渡すこととなりました。活動を手伝ってくれた報酬としても考えられますが、いまだにこの行為が妥当であったものかどうかを悩んでいます。また、彼がなぜ終始私のそばにいたのかについても考えさせられました。最後まで手伝いをしたらいつか私がお金を渡してくれるかもしれないと考えたのか、純粋に絵を描くことを楽しみ、同年代の子たちとの遊ぶことを楽しむためにいたのか、真意は定かではありませんが、私は彼の屈託のない笑顔を見ると後者であったのではないかと考えています。彼が今ガザでどのように生活をしているかはわかりませんが、彼のように学校に通っていない子供はたくさんいます。学校教育は人を育てていくのに大変重要な要素の一部であると私は考えます。しかし、彼らには将来自分の先に何かあるのかを考えるよりも、今生きていくことが大事なことです。そんなかれらに、数分間の出会いで学校教育を受けることの重要性を教員という立場でどう説いていくことができるのか、今なお考えさせられ、答えは出ないままです。

### 3. 折り紙ワークショップ

ガザにあるUNRWAが運営する学校では、折り紙ワークショップを行いました。このワークショップは昨年出会ったUNRWAのガザ教育局に勤めるリダさんから依頼を受け、活動を計画する運びとなりました。ワークショップはガザにあるアスマア学校とリマール学校の2校でそれぞれ40名程度を対象に行いました。折り紙に触れたことのない彼女たちに何を教えるか悩んだ結果、日本の子供の日にちなんだ兜とこいのぼり、ひな祭りにちなんだひな人形を折ることに決めました。授業の中では、子供の日のことやひな祭りのことについて説明をしてから実際に折り紙に取り組みました。子供

たちにどれから折りたいか尋ねると、どちらの学校の生徒も兜、ひな人形、こいのぼりの順となりました。学校の先生や教育局のスーパーバイザーの先生も折り紙に興味をもって取り組んでくれ、特に、スーパーバイザーの先生は2日目の活動では私よりも先に折り方を生徒たちに教えてしまうほどでした。そして、折り紙が完成した後はサインの嵐です。完成した折り紙に「日本語で私の名前を書いて」「あなたの名前を書いて」と、有名人にでもなったかのような気分になりました。誰もが簡単に行き来をすることができないガザでは、外国人や外国の文化に触れる機会が圧倒的に少ないのが現状です。今はインターネットが普及している世の中なので、いろいろな世界のことについて知り、学ぶこともできますが、画面上での学びと、実際に経験する学びとはわけが違います。今後、ガザの子供たちの学びの機会が増えていくことを願うばかりです。

### 4. 幼稚園ワークショップ

東エルサレムのシャファアット難民キャンプ内にあるイマーン幼稚園では、子供たちに遊びを伝えるワークショップを行いました。この幼稚園は2年前にもワークショップを行っており、その時はその10日前にイスラエル軍による侵攻があり、園長先生にその時の園児たちの話を聞き、心を大きく痛めたことを覚えています。また、幼稚園に残った銃弾の跡を見て、初めてイスラエルに対する怒りが湧いた日でもありました。私はそれまで、被害者とされるパレスチナへの支援のことしか考えていなかったのですが、自分の目でイスラエルの卑劣な行動のさまを見て、イスラエルについても知らなくてはいけないと考えるきっかけとなりました。

今回の活動では、3歳児と5歳児の2クラスで手遊び歌と工作でロケット作りを行いました。5歳児クラスは2年前に3歳児クラスだったときに会ったことも



ある子もいるということで、感慨深いものとなりました。また、先生も私のことを覚えていてくれ、また、前回やった手遊び歌も覚えていてくれ、とてもうれしかったです。子供たちは、これまで手にしたことの無い、ロケットのおもちゃを手に楽しそうに遊んでいました。こうした子供たちの笑顔がいつまでも続くことを願っています。

## 5. 変わりゆくパレスチナ

### (i) イスラエルによる占領が進むパレスチナ

現地活動の際には、3年間欠かさず東エルサレムにあるシーフ・ジャッラーファという地区と、ビルアイン村で行われている占領反対のデモ活動に参加してきました。今回どちらの地域においてもイスラエルによる占領が進んでいるのがありありと分かる状況でした。そして、それに対して反対の声を上げる声も大きくなり、行動も過激になりつつあるように感じました。シーフ・ジャッラーファではつい2か月前に正当な家の権利を持つパレスチナの老夫婦とその家族がイスラエルの勝手な裁きにより、しかも、足の悪い老人を早く出て行けと殴る、蹴るなどの暴行を加えられて、家を奪われたばかりでした。今回のデモでは実際にその家の前まで行進をし、デモの代表者によって進むイスラエルによるパレスチナ占領に関する演説がありました。東エルサレムの中でイスラエルの旗が掲げられている家は、パレスチナ人から奪った家々ですが、この1年でこのシーフ・ジャッラーファ地区だけでなく、多くの地域でこの旗が増え、これまで、パレスチナ人が多く住んでいた地域の中に正統派といわれるユダヤ教の人々をあちこちで見かけるようになりました。そして、ビルアイン村では、昨年までなかった大規模な入植地が出来上がっており、その入植地に住む家族が壁の外側から私たちの動きを見ていました。こうして少しずつイスラエルの土地であるとイスラエル

がうたっている土地に移民などのユダヤ人を増やしていき、イスラエルの土地はすべて我々のものであると主張し、パレスチナを弱体化させていこうとしています。

続く占領、夜中の誘拐、住宅地の中への催涙弾の投下、ここに住む子供たちに安全はありません。自らが立ち上がり戦わなくてはいけないという意味のもと、デモでは過激になっていきます。これまで私が見てきたのは、投石ぐらいでしたが、今回は分離壁によじ登り金網を破壊する、火炎瓶を投げる、分離壁のドアをこじ開けようとするなど、これまで見られなかった行動が多くみられました。これはパレスチナの子供たちの怒りが頂点に達しているからなのだと思います。この行動をいかに、悪いかを定めることはできませんが、この子供たちも普段は学校へ行き、家族を思いやり、普通の生活を送っています。ただ一つ普通でないのが、分離壁、イスラエル軍による侵攻、誘拐などが日常生活と隣り合わせにあるということです。まずは、パレスチナの子供たちが安心して生活を送れる地になることを願うばかりです。

### (ii) 進む女性の社会進出

ガザでは、とてもたくましい3人の女性企業家達との出会いがありました。彼女たちは、日本の一般社団法人ソーシャル・イノベーション・ワークスが主催するビジネスコンテストで優勝、準優勝を飾り、そのうちの2人は日本へも来たことがあります。しかし、その中の一人ガダはヨルダンから日本行のチケットを持っていながら、イスラエルからエレツ検問所の通行許可が下りず、ほかの2人と一緒に日本に向かうことはできませんでした。しかし、彼女は夢の日本行を諦めたくない、ラファ検問所から単身エジプトへ渡り、日本行を挑戦しました。しかし、この挑戦も日本側からの支援がうまくいかず、失敗に終わりました。そして、仕舞にはラファ検問所も閉ざされ、

ガザに戻ることもできなくなり、1人エジプトに3か月もの間取り残されることとなりました。彼女はガザの外へ出たのはこれが初めてでしたが、この間もエジプトで様々なことを学び、常に前向きに生きてきたといいます。そして、今も夢の日本行を諦めず、一緒に起業したアマルと2人で北海道大学への留学を試みています。マジドはガザにある素材で作る再生可能なコンクリートを開発し、これまで世界中で様々な賞を受賞して、ガザの外へ何度も出る機会を得ました。そして、そこではガザの人々とは違う生き方をしている同年代の女性たちを目の当たりにし、カルチャーショックを受け、そして、ガザに帰り逆カルチャーショックを受けている最中でした。同じパレスチナでも、西岸地区に住む同じムスリムの女性とガザ地区に住む自分との違いにカルチャーショックを受けたそうです。それだけ、ガザはとても閉ざされた地域であると感じました。彼女たちはまだ、20代前半で、常にパワー全開といった感じでした。そして、最後に彼女たちが話すのは、ガザの未来のために活動しているということです。この話を聞いて、ガザに十分な資源はなく、過酷な状態が続いているけれど、彼女たちのガザへの愛を聞いていると、ガザにも未来の明るい一筋の光が見えた気がしました。

## 6. さいごに

今回の活動は、11日間というとても短い支援期間でしたが、本当にたくさんの良い出会いに恵まれ、当初の計画通りに活動することができました。こうして、私が現地へ赴いて活動できたのも多くの方々からの支援や協力、応援があって初めてできるものであるということを忘れず、感謝の気持ちをもってこれからもパレスチナ支援活動を続けていきたいと思っています。

# 「第 10 次臨時パレスチナ

## 医療・子供支援活動」報告

2018年5月15日、UNRWA(国連パレスチナ難民救済機構)保健局局长清田明宏先生からメールが届きました。内容は、WHO(世界保健機構)が世界中に発したガザ地区への医療支援要請に基づき、「北海道パレスチナ医療奉仕団」からのガザへの支援のお願いでした。私から返信のメールを送ると直ちにヨルダン・アンマンから直接私のスマホに電話が入りました。

私は、「奉仕団」のメンバーと相談し、ただちにWHOからの支援に応える準備を始めました。

2010年7月、『奉仕団』を設立したきっかけが、2009年のイスラエルによるガザ侵攻への反対行動であり、これまで5回にわたりガザ地区での医療活動の「実績」を積んできたのも私達の支援実施への道を後押ししてくれました。

しかし、7月2日に札幌を発ち、ガザに「入国」するまでの間、多大な手続き上の困難が待っていました。その根本問題は、ガザ地区がイスラエル軍により「完全封鎖」されていることです。仮にイスラエルに入国できてもイスラエルからガザ地区に行くには、イスラエル軍からの「許可証」の発行が必要なのです。私達に支援要請したWHOや自治政府の保健省(MOH)は、その手続きには援助できない旨の返事が届いたのです。UNRWAの助言を得て、英国NGOのMAP—UK(Medical Aid for Palestine—UK)の援助を受けイスラエル軍からの「許可証」を得ることができました。しかも、新千歳空港を発つ2時間前にでした。ともあれ、ガザ地区には『入国』可能な事を確信して、札幌を後にしたのです。

また、イスラエル内も含め、ガザ内外での宿泊先や移動手段もすべて自前で確保しなければならず、現地での調整能力が必要でした。幸いJVC(日本国際ボランティアセンター)の協力を得ることができ、ガザ内での安全な宿泊先と移動手段を確保することができたのです。

次頁は、市民の皆さまに発した「奉仕団」の声明です。

# 「第 10 次臨時パレスチナ医療・子供支援」活動について

北海道パレスチナ医療奉仕団 (HMS4P)  
2018 年 6 月 30 日

本年 5 月 15 日、トランプ米大統領が強行した「在イスラエル米大使館のエルサレム移設」は、イスラエルによるパレスチナの占領状態を固定化し、「パレスチナの民族浄化」へとつながるものです。

これに対して、多くのパレスチナ人が反対行動に立ちあがり、特に「ガザ地区」～イスラエル国境では、抗議デモするパレスチナ青年への実弾攻撃により多くの死傷者が出ています。

3 月 30 日の「土地の日」以降、毎週金曜日（イスラム教の礼拝日）の抗議デモで 135 人の死者と 13,000 人の負傷者が発生。なかでも銃により撃ち抜かれたケガ人が 3,500 人を超えています。

このガザ地区住民の被害を前にして、WHO(世界保健機構) から整形外科医と血管外科医の派遣の要請が届きました。

これまで、9 回にわたりパレスチナ難民へ医療・子供支援を行ってきた当「医療奉仕団」は、ただちに整形外科医である猫塚義夫団長を現地へ派遣することにいたしました。

**期間：2018 年 7 月 4 日～7 月 18 日**

**場所：ヨーロッパガザ病院（ガザ地区南部）**

**支援内容：負傷患者さんの手術治療とリハビリ**

現地「ガザ地区」では依然としてイスラエルからの武力弾圧が続いており、私達は、一日も早いイスラエル軍の撤退を要求するものです。

同時に、それらの根本的な解決につながる ①イスラエルのヨルダン川西岸の軍事占領と「入植地建設」の停止。 ②「天井のない牢獄状態」になっている「ガザ地区」の封鎖解除。 ③在イスラエル米大使館のエルサレム移設の撤回。をイスラエルとその後ろ盾となっているアメリカに強く求めるものです。

私達は、皆様のご支援により今日まで「パレスチナ難民支援」を続けることができました。本当にありがとうございます。これからも皆様からのご理解とご協力を心からお願いいたします。





# 「第 10 次臨時パレスチナ 医療・子供支援」活動

団長 猫塚 義夫

## 7 月 2 日 (月)

新千歳空港を発ち、香港経由で翌 7 月 3 日にイスラエル・テルアビブにあるベングリオン空港へ到着し、ただちにエルサレムの宿舎で荷を解き明日からの準備を開始しました。

夕方、イスラエル在住のガリコ美恵子さん、Salim 医師と家族の訪問を受け依頼されいた薬剤などをわたすと同時に、米大使館移転後のパレスチナの情勢をお聞きした。西岸はもとより、ガザ・イスラエル「国境」での被害の大きさが強調されていました。

## 7 月 3 日 (火)

いよいよ、本日からガザへ・・・  
JVC パレスチナ現地担当山村女史、ジャーナリストとともに、ガザへの唯一の出入り口となっているエレッツ検問所へ向いました。そこでは、荷物検査で「ビデオカメラ」を厳重にチェックされましたが、手術記録を正確にするには VTR が必要だと訴え、持ち込みの許可を得ることができました。今回もジャーナリスト以外のカメラとビデオの持ち込みはむずかしい状況でした。

検問をくぐると、ゲートがひとつ新設されていた。また、1.5 km の金網通路はあるものの前回までのように歩くことはありませんでした。

イスラエルを「出国」後、ガザ地区へ「入国」するのに自治政府院の入国審査は容易でありましたが、ハマスの 2 回の審査は困難を極めました。つまり、事前にハマス政権の「ビザ」

が必要であったのです！！

その場で保健省 (MOH) の担当官に電話し、何とか条件付きでパス。条件とは、内務省 (MOI) に出向き「滞在許可」を得ることでありました。Ahmad Saber 運転手に私達を内務省に案内してもらい、「特別パス」を受け取ることができたのです。

Ahmad 運転手が大変気を使い、英語～アラビア語の通訳のみならず様々な場面で我々を救ってくれました。実は、この Ahmad 運転手が今回の私のガザ滞在中に私の移動をすべてを行ってくれたのです。

その後、予定を変えて、Wafa 病院を経由して目的とするヨーロッパガザ病院 (EGH、200 床規模) へ直行したのです。ここでも Ahmad 運転手が様々な手続きに力を貸してくれました。

WHO や MOH から正確な情報が送られていず、とりあえず、Mohammed Abo Jamea 医師が、対応し、外科病棟と一緒に回診してくれました。(写真)

ここでの特徴は、下肢の銃創が多く、3 月 30 日以降、50 例の血管損傷がありました。

1) イスラエル軍が Butterfly Bullet (蝶型銃弾) を使用し、入口部が小さいが出

## 第 10 次臨時医療・子供支援活動「行程」

2018 年 7 月 2 日～22 日

	宿泊	活動内容
7月2日	月	新千歳発 17:40
3	火	エルサレム① テルアビブ着 07:55
4	水	ガザ① ガザ「入国」
5	木	ガザ② ヨーロッパガザ病院整形外科
6	金	ガザ③ ヨーロッパガザ病院整形外科
7	土	ガザ④ ヨーロッパガザ病院整形外科
8	日	ガザ⑤ ヨーロッパガザ病院整形外科
9	月	ガザ⑥ ヨーロッパガザ病院整形外科
10	火	ガザ⑦ ヨーロッパガザ病院整形外科
11	水	ガザ⑧ ヨーロッパガザ病院整形外科
12	木	ガザ⑨ ヨーロッパガザ病院整形外科
13	金	ガザ⑩ ヨーロッパガザ病院整形外科
14	土	ガザ⑪ ヨーロッパガザ病院整形外科
15	日	ガザ⑫ ガザ「出国」
16	月	エルサレム② エルサレム
17	火	エルサレム③ エルサレム
18	水	エルサレム④ エルサレム
19	木	エルサレム⑤ エルサレム
20	金	エルサレム⑥ エルサレム
21	土	テルアビブ発 15:15
22	日	名古屋着 13:00 千歳着 16:55



口部が大きい。

2) 骨、筋肉、神経、皮膚、血管の大きな欠損を生じている。血行障害が著しいと、下肢の切断とならざるを得ない。その他、神経麻痺、皮膚欠損、脚短縮が後遺症となって残る。

3) 創部への銃弾の遺残が感染・化膿の原因となっている。

4) 通常1週間に医師一人当たり10～20例の手術があり、特に金曜日が多い。その他、小手術10例や一般外傷(高齢者など)4例などが加わってくる。

5) 当直は、月8回あるが銃創のあるときは眠ることができない。

6) 収入は、月300ドル程度、後はボランティアで働いている。

7) 多くの医師が、ヨーロッパや湾岸諸国に出て行く。

8) ガザから出ることが出来ないのがつらい、1時間でもエルサレムの聖地のひとつであるアルアクサモスクへ行ってみたい。

9) 毎朝07:30からミーティング。勉強会とその日の手術の打ち合わせ。

ちなみに整形外科医は、13名在籍し3つのグループに分かれ、それぞれが専門を持ちながら外傷患者者さについては、どのグループも診療することになった。私は、その中のGhassan医師のグループに入り診療を援助することになったのです。

## 7月5日(木)

06:40AMに宿舎を出発し07:10にEGHに到着し、女子外科病棟に指定された部屋へ行くが、未だ部屋は閉鎖。掃除の



おぼさんの案内で休憩室へ。すると看護学生8人がやってきて私と記念撮影。

「完全封鎖」の中で10年以上も暮らす彼女たちにとってガザ外から来た人間への興味は尽きないかの様なのです。

08:00から早朝ミーティング開始、勉強会のテーマは骨軟骨腫(Osteochondroma)、若手研修医により小講演が行われました。

その後、患者さんの案内を兼ねて病棟の回診を開始、国境デモによる下腿銃創が圧倒的に多く、創部消毒の際の痛みが強く、若者たちでも大きな声をだして必死に痛みを耐えていました。すべての下腿銃創へは、創外固定術で骨折の治療を施行しているが、様々な組織の欠損がひどく、後遺症は避けられないと思われました。

こうして、これからのガザの未来を担う若者たちを障害者に仕立ててゆく、その個人の人生を奪い、ガザの労働力を減らし、ガザの住民へ「屈服」の強要、ガザ社会に社会福祉の責任を負わせる……今回の平和デモに対するイスラエルの意図は明白であります。

今回のイスラエル軍による「ガザの銃撃」の目的は、新開発の武器の使用であり、新兵の射撃訓練ではないかと思われました。

病棟のひとりの患者さん、アスマジャマールアブダイヤーの場合です。(写真)



24歳の女性で、ハンユニス在住の女2人男1人の3人子供の母親です。

2週間前に国境近くのデモに参加、友人が怪我をしたので助けに行くところをイスラエル軍に撃たれ受傷し、ただちにヨーロッパガザ病院で手術を受けまし

た。

彼女の現在の心境をお聴きすると……

①もっと、学校と病院を立てほしい。日本からの支援が欲しい。

②治ったら、また行きたい!!!

28歳の夫も下肢に銃創あり、また友人の女性も右上肢を撃ち抜かれていました。

## 7月6日(金)

本日は、特別な日……金曜日で、5か所の『国境』で平和的デモが取り組まれる日なのです。

午前中に、ジャーナリストの取材を兼ねた病棟の回診を行いました。

やはり、銃創患者さんは、ひどい損傷です。血管が損傷しければ切断せざるを得ません、時には両下肢も。切断の理由は、創部より抹消が壊死すると、化膿し、敗血症への移行があり、それだけでなく骨癒合せず、痛みを伴うからなのです。

切断を免れても治療に相当な時間(月日)を要し、神経麻痺(多くは腓骨神経、脛骨神経)や膝、足関節の関節拘縮に悩まされるのです。また、創の化膿も深刻です。銃創は、清潔とは真逆の物質(人を殺傷を目的とするのだから)であり、感染の機会が増加します。従って、手術に際しては、創外固定による骨の一時的固定と神経、血管を勘案した可及的最大のソウハが必要なのです。蝶型銃弾によれば、小さな入口～筋肉、血管、神経、骨をえぐり取って～大きな出口部から出て行くのです。体内で、蝶型が回転して廻りの組織をえぐり取って出て行く、或いはえぐり取って体内に破片として体内



で留置されたままとなるのです。(前頁写真)

こうして、パレスチナの未来を担う若者たちに障害を残しその能力を低下させ、また社会全体に「負の遺産」を置くという「侵略者の論理」が貫かれているのです。

回診のあと、病院を後にした我々は、ハンユニスの「国境」へ行きました。

12時前後のため、この時は準備状態で、若者や子供たちが燃やすタイヤを運んでいました。

ボーダーとの距離は約200m、イスラエル側に盛られた三角形の土ノウの頂点には狙撃兵用の三角形の先端ののぞき窓がついているのが見えた。イスラエル兵からも私達が見えているので、要注意の忠告を受けたのです。(写真)



平和デモに対し、この至近距離からパレスチナ人を無差別に銃撃する様子は、まさに虐殺以外の何ものでもないのです。

子供たちが、イスラエルのフェンスから盗んだ有刺鉄線を見せてくれました。スパナで切断する姿をまねて・・・

ここで、先日若い看護学生のラザンさんが背後から撃たれ虐殺されました。白衣を着ていた彼女は、容易に狙撃兵のまもになったのです。彼女は、日頃から傷病者への優しい想いがあり、自宅に引き治療を施していたのです・・・。自宅は、国境のすぐ近くで、そこに住むお母さんは、娘を誇りに思っているとのことでした。

一方、近くの国境では、イスラエル軍が地下トンネルの予防・破壊と称して、分離壁を地下20mまで建設しているクレーンが見えた。地下20mの分離壁は、

地下水脈の遮断を意味しており、ガザ地区の砂漠化と人の住めない荒廃地化へと繋がるものなのです。

16:30から「国境デモ」へ・・・、場所は、5か所あるうちの最大規模のガザ市内東部の国境であり17:00過ぎには現場に到着。すでに人が集まりだし、多くの国際メディアが大きなビデオカメラを構えて、陣取りをしていました。その多くは、ヘルメットと防弾チョッキで「防御」していたが、私達は、「PRESS」のゼッケンだけでした。到着するや否や独特のにおいと舌先のピリピリ感が出てきた。薄い毒ガスが漂っているかも知れません。催涙ガスにまかれそうになったら、ただちに車の中へ。そして、フェンスへは、絶対近づかないように。そして、玉葱を渡され、ガスでなみだが出たら玉ねぎを絞って目につけるように指導されました。(写真)



17:30を過ぎて、パレスチナ人がどんどん集まってきた。救急車も10数台あちこちに配置されています。タイヤの煙の勢いは、どんどん強くなる。この黒煙の中を突き抜けてイスラエル軍が白い放物線を描きながら催涙弾を撃ちつけてきました。(下段写真)

一部は私達の頭を通り後方の二人連れのすぐ近くに落下・・・危うく直撃を免れる事が出来ました。



現地の風向きは、海風であり、煙や催涙ガスは、イスラエル側に流れて行くのだ。従って、イスラエル側は催涙弾を深く打ち込むかドローンを用いてパレスチナ人の背後に催涙弾を落下させるのです。

参加者は、若者を中心に女性や子供たちや障害者もいました。

両大腿切断で車いすの男性。松葉つえをつく青年、いまだ、創外固定のピンが装着している若ものもいました。昨日のインタビューでの患者さんの言葉・・・「治ったらまた行く」が脳裏に浮かぶのでした。(写真)



親や祖父母に連れられた子供たち・・・一緒に写真撮影をせがまれた可愛い少女もいました。理由を聴くと「パレスチナの土地のため」と話してくれた。国のためをいうより土地のためという言い方が心に残りました。(次頁写真)

こうして見ると、国や組織による依頼に強制されて闘いに向うというのではなく、個人の意志で、自分たちの暮らす土地のために、パレスチナ人の人権確立のため世代を受け継ぎながら闘いが粘り強く継続しているのが分かりました。

こうしたパレスチナの「地に足のつい





た闘い」とイスラエルの「国のために戦うことは素晴らしい」という権力からの闘いの強制は対局にあるものなのです。

歴史的に見れば、ナチス・日本軍とレジスタンスの関係に似ているかもしれません。

そうしているうちに、私は多少「前線」へ向かいました。すると突然激しい乾いた銃声が響いてきました。私は、廻りの人々とともに後方へ踵を返し走りました。しかし、右足に針金が巻き付き思うように走れない・・・何とか後方で待つ車の陰へ・・・

すると私たちのすぐ前方で左顔を撃たれた若者が2~3人のパレスチナ人に抱きかかえられて、救急車へ運ばれてきました。イスラエル軍による卑劣な武力弾圧の結果です。(写真)



また、近くでは右膝を挫傷した外国の報道陣が苦悶の表情をみせていました。

この間、何発も催涙弾が撃ち込まれ、その間を見て実弾が飛んでくる・・・このことの繰り返しでした。時間とともに、平和デモ隊は、フェンスに沿って右側へ広がりを見せてきた。その方面でもタイヤに火がつけられ、イスラエル軍が催涙弾を発していたのです。(写真)

空を見上げると、パレスチナ人により



凧や風船が上げられ、イスラエル側に火災を起こさせるのです。指摘されていたドローン兵器を見ることはありませんでした。

「平和デモ」で感じた事を以下に列挙いたします。

①パレスチナの権利と人権を守る闘い。

②参加者は、幼少児から老人まで・・・世代として継承されている。

③始まりは穏やかだが、徐々にそして死傷者が出ると一気に熱気が出てくる。

④イスラエルは、新兵器の実験場として蝶型銃弾を使用し、また新兵の射撃訓練としても活用。

⑤ドローン兵器：ガザ地区に入り込み、空から銃撃、パレスチナ人の後方から催涙弾や汚水を落とす、また空から監視を強めている。

## 7月7日(土)

週末で病院は休みであり、日直(当直)医のみのHOLIDAYです。

私の友人からFace Bookを見て「国境には行かないように」との親切な忠告があった。

昨日の『国境デモ』では、1人死亡、30名のケガ人が発生したとのことでありました。

当病院でも銃創の患者さんが昨日、緊急で手術を受けていました。

午前中、売店横のガーデンでまとめの仕事に専念し、たまった洗濯も行いました。

病室は、忙しそうで慌ただしく、かつ

実習の看護学生たちがさらに賑やかさを増しているようでした。

## 7月8日(日)

今日は、週初めの多忙な日です。08:00からの朝会から仕事の開始。院長から神経外科医を紹介され、10月の再訪時に脊椎手術の調整をするとのことでした。きっと私の履歴書に専門分野として脊椎外科と膝関節外科が記入されていた事によるものと思われました。

その後、手術室へ・・・①右肘上腕骨外力骨折の経皮的スクリューと2本のK-Wにて固定。②以前左膝前十字靭帯損傷手術後に再受傷＝左膝腓骨小頭剥離骨折＋外側副靭帯断裂、内方不安定性が著明・・・剥離骨折部骨接合、外側半月板修復、ギブス固定を行った。Dr.Ghassanの手術は、繊細で正確でありました。

## 7月9日(月)

本日から出勤は07:00とし、病院到着は07:30とした。本日のミニレクチャーは、手の化膿性腱鞘炎・・・原因～病理～治療法、特に抗生剤の使用法や副作用などコンパクトしかも内容豊かでありました。

その後、08:00から受け持ち患者さんの回診が一気に始まりました。スピーディに、一般外科と立ち止まって即席検討会、その間頻りにコールが入ってくるのです。

大腿骨頸部骨折にはAustin moore型人工骨頭を使用しており、日本では40年前に出回っていたものです。これだけガザ地区の医療材料不足が進行しているのを垣間見た思いがしました。

10:00から私の所属しているDr.Ghasannグループの外来へ・・・

Dr.Hassanは「今日は、大変忙しい!!」と気合い十分です。

これから13:50まで、およそ100人の

患者さんを診察するのでした・・・。

銃創患者さん ①右肩を前方から後方へ撃ち抜かれ、レントゲンでは弾丸の破片が残っていた。②左ひざ関節の銃創・・・上内側から下後方へ、幸い銃弾の遺残はない。③足部銃弾創でレントゲンで弾丸の遺残がある。④勿論、右切断患者も・・・。

外来の混雑は、想像以上です。患者同士の怒鳴り合い(パレスチナに関わらず、アラブ人は声大きい)、待ち時間が長いのか診察室のドアをたたく。

こうした中で、病棟と同様に保安職員が必ず常駐しているのは、暴力的？トラブルの発生があるかも知れません。時には、Dr.Ghasann が直接仲裁に入ること、そして無理やり診察室に乱入しようとする患者さんを一喝することも・・・。

そうしているうちに、窓からコーヒーやお菓子の差し入れがあり、それを口にしながらの診療が続くのです。

この間、発電機のトラブルで8回ばかりの停電がある。ちなみに、ガザ地区は1日の通電時間は4時間です。病院は自家発電機械の電源を確保しているが、一時的な停電は避けられないのです。

患者さんが混雑してくるに従って、診察室内も殺気立ってくるのです。診ても診ても患者さんのカルテが積み重なって行く、それを見た先生は「もう何とかしてくれ!!!」と叫び、看護師が積んだカルテを一時的にゆっくり持って帰って行くのです。(なんだか私の外来診療に似ているようで、心の中でどこも混む外来は同じだと思いました。先生の苛立つ気持ちを理解できました)

先生は一息した後、次の患者さんには、笑顔で語りかけていて、患者さんに優しい一面を見る思いがしたので。

一方、一人の患者さんへの付き人が多いのは病室と同じ、また紹介患者さんは、MRIをCDに入れて持ってくるのです。膝の患者さんが多い・・・。今日は、半月板損傷の患者さんが多いようだ・・・手術予定した患者さんをノートにつけて

日程を調整しているのだ。

先生の隣では、若手医師が手際よく薬を処方したり、レントゲン指示を出したり、病状の説明をこなしていました。

Ghasann先生は人望に優れ、いろいろな医師、看護師などから盛んに相談を受けている、また彼の携帯には遠慮なくコールが入ってくるのです。

さて、毎日お世話になっている運転手のアフマドさん、度のきつい眼鏡をかけインテリ風が十分です。様々なお話しをしてくれます。ガザ地区は若者の失業率は60%です。大学を出ても生活と教育にかかる生活資金がありません。彼は、英語を学ぶため車を売り払い、エルサレム大学の公開講座を卒業しました。現在6歳と3歳の女の子がいますが、このままではお金がなく十分な教育を受けさせることが出来ないと寂しい表情になりました。(写真)



## 7月10日(火)

しかし、私から日本語を学ぼうとして、明日から挨拶と数字のいち、に、さん・・・から始めることとしたのです!!!!

早朝、アフマド運転手から電話あり、車の故障で代車を送るとのこと。せっかく、ご家族にプレゼントを用意しましたが明日としました。

07:40、病院到着、女性外科病棟にあるカンファレンスルームへ・・・ちょうど今日のプレゼンの研修医(整形外科2

年目)が来ており、本日のテーマは、骨粗鬆症で内容も豊かでした。特に、ビスフォ製剤の使い方に議論が集中していました。

その後、男性、女性、小児の外科病棟をラウンド。昨日来の患者さんに一人ひとり説明をして歩きました。男子病棟では看護師さんが自分の部屋に案内し、針、マッサージ、指圧などについて「信じている」と説明していました。

また、次の日曜日に予定しているイリザロフ創外固定例(感染性儀関節例)へバンコマイシンのセメントビーズを使用するため、薬剤部と相談。

その後、ICCUにも整形外科の骨折例や左中指切断例などの入院に、下級医師へ今後の指示を出していました。

18:20からジャーナリストと取材をかねて食事となりました。

彼からは、病院の様子、支援の動機と経過、「奉仕団」の成り立ちと経過、個人の思い、何故パレスチナなのか、パレスチナと日本の関係、パレスチナを切り口とした人権、70年の長きにわたる占領への国際社会の支援、パレスチナとイスラエルの非対称性、中東問題の根源としてのパレスチナ問題・・・市民、友人への広がり可能性などなど・・・

話は尽きませんでした。

## 7月11日(水)

本日は手術日ですが、ジャーナリストによる手術室での取材です。病院当局はもとより、Ghasann先生方も了解でした。彼らも手術衣に着替えてOP室の中へ・・・

1例目：小児股関節脱臼手術後のギブスの巻き替えを全身麻酔下で施行。石膏ギブスでありました。

2例目：右肩前方脱臼でバンカート病変もあり、脱臼を予防するために烏口突起による骨性形成術でありました。

3例目は、右膝内側半月板降格の垂直・

銃断裂。ハサミ、バスケットパンチ・シェーバーで切除団端を形成していた。手術時間は30分。

こうして、手術室の中で彼らの様子を拝見していると

①医師同士の仲がいい、麻酔医も含めて……。

②看護師が元気……時に手術内容を指示。

③道具を投げてわたすほどの関係。

④術中、停電3回……無影燈と麻酔器のみ稼働し、携帯電話の明かりで照らす。

Ghasann先生とのインタビューでは、外傷患者の70%は整形外科の外傷を合併しているとのことでした。

18:00からルームさんに誘われて市内をドライブ……その中でのお話し……

①封鎖後の状態が一層悪化し、失業率は70%へ。

②公務員の給料は二分の一。

③貧困の進行……物乞いが多い……メディアの外国人がお金を落とす……ホームレス、両親が麻薬依存？

④環境汚染……水質汚染……海の汚染（Black Sea）10か所で無処理の汚水の排泄……以前は、遊泳をしていた海岸もです。

⑤癌の発生……一族に必ず癌で困っている人がいる状態……増加している 環境汚染で低年齢化している。

## 7月12日(木)

朝から出勤で海岸沿いを走ると、悪臭が漂っている。燃料不足に汚水の海への垂れ流し状態です。また、車を停車するとだいたい「物売り」の子供が寄ってくるのです……貧困の進行……。

回診の後、Ghasann先生が明日金曜日夜の院内宿泊先を手配してくれました。病院事務長に直接判断を仰ぎ、看護専門学校の前への素敵な部屋を確保してくれました。感謝です！！

売店横で、休憩していると

①患者さんの相談……インドネシア病院からの紹介

その父を兄弟が5月14日に受傷した22歳の男性の患者さんの相談。

大量輸血のため、急性腎不全、骨癒合できず

胸部も撃たれ、気管切開してtubeも入っている……感染している

そして、全身麻酔は困難であるとのコメントが書かれていた。

「GAZAの医療はよくない、不十分だ!!!」と何度も叫んでいました。

その後、院内・外来見学したが、どこもこれも大変混雑。整形外来も混雑……

そこで、右下腿銃創の若ものから声をかけられました。先週、外科男性病棟に入院していた患者さんです。本日は、足指が壊死していました。恐らく、切断になるであろう。(写真)



こうして見ると、恐らく10日前後で退院となっているようでした。

更にERに立ち寄ると、先日病室でインタビューした女性が車いすに乗り、うつむいていました。(とても話しかけることはできず……)

また、黒いヒジャブの女性がアラビア語で話しかけてきましたが……お金の無心の用でした。以前に比べて子供の物売り、お金のせびりが増加しているようだが、大人の無心は初めてでした。

その後、消化器外科・内視鏡関係の医師が、アイスクリームを二つ持ってきて談笑……

話題は、やはりガザの状況についてです。それにしてもフレンドリーな

医師が沢山いることが分かりました。

他のジャーナリストから電話があり、取材をかねて夕食を一緒にすることに。

「奉仕団」の生い立ちや、私個人が中東・パレスチナに関心を持ったいきさつなど……

その後、私の71歳の誕生日を告白したら、せっかく保管していたジャックダニエルでお祝いをしてくれました。……本当に特別な誕生日でした!!!!

## 7月13日(金)

本日は、3月30日(土地の日)から数えて100日の金曜日です。

先週よりも「国境デモ」が大掛かりとなりケガ人が増えることが予想されず。

予定通り、本日は病院ERに泊まり込みです。昨日Ghasann先生が尽力して確保してくれた宿舎に荷物を置いて、早速13:00に救急救命室(ER)へ……。



ERには、すでに屈強な男性看護師が6~7人待機していました。また、ERの入り口には警察が待機しているのです。

運ばれてくる患者さんの家族が患者を何とかしようと思いが募り興奮することもあるためでもある。勿論、ケガ人・犠牲者の実態を把握するためでもあります。

19:00~20:10すぎまでの短時間に運ばれてきた銃弾創患者は、40人。

うち、血管損傷9例、緊急手術4名、私が関与したのは17名であった。

①左眼 角膜潰瘍 眼の圧迫が原因 眼科医の言葉：フィンランド、ドイツ、インドへの勉強の機会を尽くすが、イスラエル軍からの「出国許可」が下りない



とのこと。インターネットでのやり取りだけとのことでした。

②脳血管障害の女性・・・総頸動脈の狭窄でめまい・・・これは内科で・・・

③ 82 歳男性 右大腿骨頸部骨折・・・入院し手術リストへ・・・

④心不全老人

⑤ 5 歳の子供：顎の裂創 縫合処置、デッキもなくそのまま施行

⑥ 2 歳 男児 頭部打撲・・・3 回嘔吐したら CT～MRI の予約。

⑦ 左眼ガス損傷 角膜潰瘍

⑧ 右膝の銃弾創 2 週間前（6 月 28 日）に受傷

一人の患者さんに大勢の家族がついてきて ER 内は大混雑

⑨小児男子 2 歳 右 X 脚 XP 後 インソール指導

⑩警察官 頸椎症・・・運動療法指導

⑪警察官 腰部椎間板症・・・運動療法指導

\* 卒後 4 年目の女性看護師さんが活躍、週 3 回の無償のボランティアです。

理由は、患者さんのため、技術のため、ガザのため・・・

この看護師さんは、私のためにゴム手袋を用意したり患者さんを教えてくれたり

一緒に縫合の手伝いをしてくれました。



た。(写真)

A) 16 歳男子 催涙弾を眼下部に直撃

B) 10 歳男子 催涙弾を胸腹部に直撃

右下腿・右大腿に銃創 腹部 US は NP

C) 若者 右下腿銃弾創 内から外 外は 5 cm まで拡大

D) 若者 右足銃弾創

E) 若者 左眼下打撲

F) 成人 右大腿銃弾創

(36)

G) 成人 右股関節銃弾創 血液が吹き出し止血できず・・・点滴ボトルを当てて圧迫し・・・即座に手術室へ・・・

H) 成人 右大腿銃弾創

I) 若者 左下腿・左前腕銃弾創

J) 少年 右大腿銃弾創 外側から内側へ貫通

K) 子供 打頭部打撲

L) 若者 頭部外傷 爆発による

M) 若者 左下腿銃弾創 外側から内側へ貫通

N) 子供 右膝脛骨銃弾創

O) 若者 左下腿銃弾創 外側から内側へ貫通 遺残なし 手術・・・血管損傷は部分的

\* ER での付添若者との会話：

「外国から来てくれて誇りに思う」と話しかけてくる・・・

誇り高いガザの人々の心に寄り添えたのかも！！

20:45 警察官（7 名）が引き揚げていった

・・・一応一段落か？？？

その後、地元のジャーナリストからのビデオ取材があり、自己紹介、ガザに来た感想、患者さんの状態、日本から見たガザの思いなどを聞かれ、英語で答えてアラビア語に通訳してもらいました。

その後、手術室へ



若者の左下腿銃弾創の患者さんです。腰椎麻酔下、輸血施行 創外固定で固定後、血管外科医が・・・

幸い、わずかながら血行が保たれていたため、血管吻合は吻合せずすみしました。

24:00 宿舎へ・・・

筋向いの部屋にドイツから来ている脊椎外科医がご挨拶に来てくれました。6 か月に一度脊椎の手術へ来ている。神経外科部門への協力でありました。

## 7 月 14 日(土)

朝、ゆっくりして売店の横で回診時、花をくれた患者さんと談笑後 11:00 にアフマド運転手のタクシーで宿舎へ戻る。休養の後、まとめ仕事に取り掛かる・・・

13:20

JICA の Saher 所長さんから電話があり「昨日より国境でハマスの施設への爆撃が続いているので危険です。

アパートから出ないように

明日のことは、安全だと思うが 06:30～07:00 に再度連絡する」とのこと。

13:41

アパートの近くで大きな爆発音あり・・・すぐ外を見るが平穩、人はゆっくり、車も走っている・・・ガザ市内にあるハマスの施設へのミサイル攻撃であった

14:00 頃

REEM さんから電話  
「危険な状態なので、今日の自宅での夕食会は中止

何か食べるものを届けます・・・水とパンをお願いした!!!」

15:41 吉田美紀さんからコール

「昨夜からイスラエルがミサイル攻撃を始めている。主に国境だがガザ市内にもハマスの施設があるので、ミサイル攻撃の可能性があり。

大使館から連絡が来ていますか?・・・・来ていません

吉田さんには国連から動かぬように指示があり、今夜の REEM 宅は延期

ここのビルは、国連関係者のビルなのでここにいる限りは安全です!!!

昨日は、一日で 200 人のけが人が出ています。

明朝のことは、セキュリティの関係で後で判断・・・明日アパートから出ることが出来ない可能性もあり」とのこと。

15:53 ガザ JICA の Saher 所長からの電話

吉田さんからの電話のあったことを伝える

「とにかく、連絡があるまでアパートを動かないでください!!!」

その後、遠くで散発的に「音」が聞こえる程度でしたが、日本大使館から messenger

で「退避」の強い要請が届きました。

こうした中で

②安全が第一なこと

③在パレスチナ日本大使館・大久保大使から直接強い口調で「退避」の連絡が届いたこと

④次回の「支援活動」に向けて様々な支援をするときに協力関係が大切なこと

⑤現地の吉田美紀さんとは、すでにお会いし、その後電話で 10～11 月のガザ地区での活動バレーボール、子供支援、絵画交換、美術展などの『打ち合わせ』ができていたこと。

⑥当初の予定としてあった、当直も含

めて救急医療、銃弾創などを観察し治療に参加できたこと。

⑦ UNRWA はもとより、JVC, ガザ JICA や英国 NGO・MAP-UK、MHO(保健省)そして WHO とも連携できたことなども大きな成果と判断できたこと

を勸案し、「退避」を判断しました。

早速、荷づくりと滞在したアパートの掃除でした。

そして、お世話になった清田先生、WHO, MAP-UK、MOH にそれぞれ感謝とお礼、そして「退避」せざるを得ない旨をお知らせしました・

また、吉田さん、ガザ JICA の Saher 所長さん、Ghasann 先生、Reem さんにそれぞれ電話でお礼の連絡を入れたのです。

夜になると、普段はにぎわう港にも人出が少なく、11 時前には港の明かりもすっかり消え、多くの住民は屋内へ「避難」しているように思いました。

しかし、何時空爆がやってくるかわからず、眠りに入ることができません。夜が明ける 6 時ぐらいから 1 時間ばかりうとうとした程度です。

考えると、こうしたイスラエルからの空爆にガザの住民は何時も怯えながら・・・・暮らしているのです。

## 7月15日(日)

ガザ「退避」の日

朝、港を見ても漁に出る漁船は 1 隻のみ。きっとイスラエルのミサイル攻撃に備えたものと思われます。

07:30 ガザ JICA の Saher 所長さんから電話あり、08:30 に迎えに来るとの連絡がありました。

部屋のカギを管理人(いないのでポリスに依頼)にわたす様をお願いして車に乗った。

しかし、このままガザの地で空爆に怯えながら生活せざるを得ないパレスチナ人の事を考えると、後ろ髪をひかれる断

腸の思いだ。そして、エルサレムに戻った今でも彼らのことを思うと胸が張り裂けそうになるのです。

今回を通して、私は「本当の不屈」をガザの人々から学び、大変貴重な経験をする事ができました。

車は、防弾装備のあるランドクルーザーであった。最初に、昨日爆撃されたガザ市中央部を廻ってくれた。大きなグラウンドに面していた建物が狙われたのである。その建物では、ハマス軍が市街戦の訓練をしたり、グラウンドで行軍訓練をしており、そこが狙われたようだった。(地下訓練場もあったようだ)

グラウンドは近くにある大学の学生がよく集まるところです。幸い大学生の犠牲者はいませんでしたが、建物内で遊んでいた少年二人が犠牲となったのです。(写真)



その後、3人の日本人ジャーナリストとともに合計4人の日本人でガザを後にした。

途中ハマス政権の首相と電話で繋がりを、医療支援の私に感謝の言葉があった。私は、10月にまた医療支援に来る事を告げお別れの挨拶とした。

エレッツ検問所は、閑散ではなくイスラエルの侵攻を危惧してガザから出る人(主に外国人)がいた。

エレッツ検問所を抜けると、大使館が用意した防弾装備のあるランドクルーザーでエルサレムへ向かったのです。

先に、私の宿舎をさがしてもらいました。予約していませんでしたが、ガザでの事情を話すと、いい部屋を「21日のチェックアウトまで」といつてくれた、従業員の皆さんに感謝です。

貯まっていた洗濯とシャワーを浴びた後、ベットに倒れ込んだ・・・そういえば、丸2日間ろくに睡眠を取っていなかったのだ!!!

21:00 に部屋の電話で目が覚めた・・・ガリコ美恵子さんの訪問である。

前もって「ガザ退避」をメールしておいたので、仕事を終えてきてくれたのです。

旧市街を歩きながらこれまでの経過を聞いてもらい、いつものピザ屋さんでピザとジュースで夕食としました。

①本当に怖がっているのは、イスラエルだ。トーチカから隠れてパレスチナ人を撃ってくる。

無抵抗の人々が何万人も行進してきたら・・・恐ろしいだろう!!!

②テルアビブでは、左派のデモが3,000人で行われているが、マスコミは伝えない!!!

③デモを見て、抗議行動「土地の権利」は世代を継いでいる・・・決して諦めものではない!!!

④シエイクジャラのデモに日本語のプラカードを作り持って行く

美恵子さんと会って、様々な会話を通して、かなり気持ちが落ち着いてきました。

その後、ホテルで12時間の睡眠を貪ることになりました・・・

## 7月16日(月)

昨日、ガザを「退避」し、いつもの宿舎で雑用の整理を行ないました。

16:00前 エルサレム在住のジャーナリストからの取材がありました。

7月4日ガザへ向う時、タクシーのキャンセルにあい困っていたところ、エレッツまでチャーターした車に同乗させてもらいました。そのお礼を語りながら取材が進められた。

ガザの医療現場の状況を詳しく説明いたしました。

## 7月17日(火)

09:00 土井敏邦さん、鈴木東大院生の訪問を受けました。

議論したことは・・・

①現在起きている事態の把握とともに「本質」の提示が一番大切である。

②ガザの本当の苦しみは何か・・・それは、この後にやってくる

③貧困、環境破壊・汚染・・・絶望の街か??? ジェノサイドへ向かうのか

貧困では生きて行けず・・・ハマスが不満を外に向ける

④ガザの人々の生活、暮らしを伝える事の大切さ

ガソリンも高く停電も当たり前、日常生活の酷さなどをメディアが伝えず

また、下水処理が出来ず海洋汚染も進行・・・感染症で少年が死亡

正確なデータ無いが環境汚染から来る癌の多発・・・

これから障害者のリハビリと心の健康へのかかわりが大切になる

電気、汚水処理の専門家集団の支援も大切。

⑤「占領」とは何か!!!

人間が人間ではなくなる 人権、移動の自由、貧困、identity, 尊厳と誇り・・・

⑥日本の抱えている課題と接点を持つことが必要

⑦医療を通して占領の実態、貧困、環境、絶望の実態を映像でも

⑧北海道だけでなく東京での発表が必要・・・多くの団体が一緒になることが大切



お昼から、旧市街へ・・・

ダマスカス門では、3か所に石造りの硬性のイスラエル兵の監視所が完成していました。(下段写真)

18:00 サリム先生、モハンマド先生の訪問

モハンマド医師たちの9月来日の打ち合わせを行い、特にビザ申請で困難があればいつでも連絡をいただくこととしました。今回の札幌での技術研修では、初めて札幌医科大学附属病院救急救命部での研修・見学が実現することになりました。

## 7月19日(木)

お昼に土井敏邦さんとアミラ・ハス記者の訪問を受けました。アミラさんは昨年日本・沖縄にも来られたイスラエル左派新聞ハレーツ紙の記者です。(写真)イスラエル人である彼女の取材と論



考は、イスラエルの不当な軍事支配とガザ封鎖を現場に立脚して根本から批判し、私達も学ぶべきことの多い誇るべきジャーナリストなのです。

また、本日は在パレスチナ大久保武日本大使との食事の約束です。19:00からAMERICAN COLONY HOTELで会食を行いました。

今回の大使とのお話しで私が持った意見は、以下のようでした。

\*歴史的には、ユダヤ人の歴史・ヨーロッパとホロコースト(これは日常会話でもよく出てくる)1948年のイスラエ



ル「建国」後は「国家」を死守するためには何でもやる。

イスラエルは、NCND 政策（肯定も否定もしない政策）で原爆 200 発保有・・・それでもパレスチナを怖がる。

\*徴兵制度が社会の深部にまで根付いている・・・就職も軍隊の所屬と評価で決まる。

\*「国際デモ」で脚を撃つ目的は、進んでくるデモ隊が怖くデモを止めるため撃ち殺してしまうと、パレスチナ人の心に反イスラエルの火をつけ「屍を乗り越えて」デモが進む。歩くのを止め救護に他のデモ隊の手がかかるようにする。

\*しかし、「石つぶてとマシンガン」「ナイフとマシンガン・・・この非対称性は、恐怖を『克服』するためにとんでも OK としているのです。

\*「テロ」指定・・・9・11以降「テロ」と指定すれば、その以前の歴史を捨象して「何をしても良い」とのムードが出来上がり、パレスチナ人への弾圧が強まった

\*リハビリの重要性 義肢作製など日本の援助が必要

リハビリの概念と技術の進歩、人的、システムの交流・

パレスチナの大学人の交流、学生交流、

\*日本との病院文化の違い：清潔概念など 病院、特に整形外科のチームは OK だったが。

\*パレスチナの技術水準・・・低下はないがシステム上のある問題点

\*イスラエルは日本と似ている・・・ファッション的

ユダヤ原理主義と国家主義・歴史修正主義

\*米トランプ大統領以後、イスラエルは「わが世の春」状態。

これらを抜け出る道として、以下のことが私の頭を駆け巡っていました。

1) 国際世論のたかまり・・・パレスチナの「国家承認」と対イスラエル

2) 国連機能の再強化・・・大国のから

み

3) パレスチナ支援・・・NGO 活動

4) 市民が・・・国内世論の形成を「日本のイスラエル」を念頭に、「場」の拡大と世代を継承して行くことが必要・・・

①「質」の向上を図りながら多面的・重層的に・・・

パレスチナと「沖縄、憲法、戦争、貧困、ジェンダー、教育、医療、環境汚染対策、人権、産業育成、文化・芸術、スポーツ、起業・企業・・・」

②日本・イスラエルの準同盟関係解消へ

武器輸出禁止＝軍事技術支援禁止  
経済的協力関係の解消＝不買運動  
イスラエル国内左派支援  
などでした。

## 7月20日(金)

本日は、金曜日、シェイクジャラ通りでの「イスラエルの軍事占領反対」「ガザ地区の即時解放」を求める集会の日です。これには、主にイスラエル人が多く参加しています。それも大学関係者やマスコミ関係者たちが多いのです。イスラエル人の中にもシオニスト政権が進める西岸地区の軍事占領やガザの封鎖反対を主張する人々がいるのも事実なのです。

ここでのスローガンは、アラビア語、ヘブライ語、英語で書かれています。しかし、そこにも日本人がいることを示すために今回は日本で書いたプラカードを作成し参加して来たのです。(写真)



## 7月21日(土)

本日は、帰国の日です。

イスラエルによるガザ空爆の強化により、当初の予定を3日間短縮させられてしまいました。7月15日の朝、やむなくガザ地区を『退避』させられる無念さとイスラエルの「完全封鎖」下に置かれ、空爆に怯えるガザの人々を考えると胸が張り裂けそうな思いになることは今でも続いています。

今回の「第10次緊急パレスチナ医療・子供支援活動」は、WHOの緊急要請に応える形で猫塚義夫団長一人の参加で行わざるをえませんでした。

札幌では毎回、宮島豊副団長を責任者として憲法学者・清末愛沙室蘭工大準教授、高崎暢弁護士、松本一敏氏を中心に在札幌本部が作られています。彼らが私の帰国後、7月24日に「緊急記者会見」と「緊急報告会」を開催し、ガザの地区の実態とそれをもたらすパレスチナ・イスラエル問題の本質を市民の皆様にお知らせする準備を進めています。(次頁写真)

現在は、本年(2018年)10月27日から予定している「第11次医療・子供支援」活動を準備しているところです。今回、残念ながら不十分であったところをその時に補うことができると考えています。

# 資料

**猫塚義夫医師 緊急報告会**  
 ～いまガザで何が起きているのか、その本質とは何か～  
**2018/7/24 (火) 18:00 開場 18:30 開演**

会場：かでの27 940研修室 資料代：500円（学生以下無料）  
 札幌市中央区北2条西7丁目 (011)204-5100 緊急講演会に関するお問い合わせ (090-7516-8711) 家島まで

7月12日ガザ地区ハンユニス近郊の病院で治療にあたる猫塚義夫医師。抗弾筒患者が次々と運ばれてくるが、医師も弾薬も足りていない。



7月6日ガザ東分断路周辺でのエルサレム首都承認と軍事占領に反対する平和デモ。デモに対し催涙弾や時に実弾を撃つイスラエル軍。撮影：猫塚義夫





イスラエルの建国により奪われた故郷への帰還を求めながら、占領に抗するパレスチナ人の非暴力デモ。それを武力で鎮圧するイスラエル軍。その結果、多数の死傷者が出ました。国連WHOの要請によりガザの病院で緊急医療活動中の猫塚義夫医師が、同軍の攻撃激化のため活動の継続が不可能となりました。無念のなか札幌に帰郷、緊急報告会を開きます。ガザの状況を知る貴重な機会です。ぜひご参加ください。7月15日付、猫塚医師の現地からのメッセージです。

「いつ、何が起きるのか・・・なかなか眠りにつくことができません。もう、4:15AMですが・・・」

『天井のない牢獄』に200万人のパレスチナ人がミサイルに怯えながらの生活が強いられています。私達だけが外に出る・・・ガザの人々を思うと本当に後ろ壁が引かれ胸が張り裂ける思いなのです。10～11月に必ず再訪することを誓って、無理やり自分の心を納得させているのが正直な気持ちです。」

解説 清末愛紗  
 室蘭工業大学准教授  
 憲法学者  
 国際法に詳しくパレスチナ問題等に取り組んでいる。



イスラエル軍による空爆が激化するガザ地区



**主催「北海道パレスチナ医療奉仕団」**  
 065-0019 札幌市東区19条東22丁目5-13  
 TEL&FAX:011-780-2730 Mail:hokkaido.palestine@gmail.com  
 共催「医療9条の会・北海道」「たかさき法律事務所9条の会」





# 「娘の武器は、白衣だけ。撃つなんて…」



ラザン・ナジャルさん

パレスチナ自治区ガザ地区で続くイスラエルや米国への抗議デモで、イスラエル軍に撃たれて亡くなった女性看護師(21)に対し、イスラエル軍は5日、「意図的、直接的に狙った銃撃はない」との声明を出した。撃

たれた状況の調査も続けるとしたが、パレスチナや国連など国際社会からは「過剰防衛だ」として非難が強まっている。女性看護師はパレスチナの医療救済団体のボランティア看護師ラザン・ナジャルさん。1日午後、イスラエルとの境界から約1000人のデモの現場で負傷者を助けようとしたところ、胸を撃たれて亡くなった。

デモはパレスチナ難民の帰還を求め、米大使館のエルサレム移転にも抗議し、3月末から続く。ガザ地区南部ハンユニス郊外の自宅で取材に応じた母親の

## ガザのデモ 21歳看護師の銃撃死、波紋

イスラエル兵に撃たれ亡くなったラザン・ナジャルさんの写真と血で染まった白衣を掲げる父アシュラフさんと母サブリーンさん＝ガザ地区ハンユニス郊外、渡辺丘撮影

「彼女が唯一の武器は白衣だった。デモの現場で人の命を救っていた娘を撃つなんて。国際社会は世界的な人道問題を見過ごさず、中立的な独立したチームによって調査してほしい。」

「ガザの保健省によると、一連のデモに対するイスラエル軍の銃撃などで120人以上が死亡し、1万3千人超がけがをした。医療従事者はラザンさんら2人が死亡、220人超がけがをし、30台以上の救急車が損傷した。」

サブリーンさん(48)によると、ラザンさんは当初から現場で救急活動に当たっていた。心配するサブリーンさんに「白衣と(医療従事者を示す)身分証明書が私を守ってくれ。人道支援をしているだけだから大丈夫」と話したという。戦争で傷ついた人を治療する看護師になることが、子どもの頃から夢だった。「いつも笑顔を絶やさず、他人に手を差し伸べ、誰からも愛されていた。サブリーンさんは血に染まった白衣を携えて語った。

## イスラエル攻撃で多数の死傷者



猫塚さんは2010年に道内の医師らで結成した「北海パレスチナ医療奉仕団」団長の。これまでガザやヨルダン川西岸を計9回訪れ、それぞれ約3週間滞在し、国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)と協力して活動してきた。エルサレムの西約70キロにあ

るガザでは3月末から、米大使館移転に抗議するデモが断続的に発生。制圧しようとするイスラエル軍の攻撃によって、これまでにパレスチナ人1万5千人以上が死亡、1万数千人が負傷している。WHOの緊急医療チームや、国際医療支援団体「国境なき医師団」だけでは医師が足りず、治療の遅れから脚を切断せざるを得ない患者も多く出ている。イスラエルとの境界にある検問所も封鎖され、救急車も容易に通行できない状態が続いている。

# 医師猫塚さんガザ再訪

## 札幌から2週間滞在「多くの命救いたい」

猫塚さんは4日に現地入りし、イスラエルとの境界に近い総合病院「ガザ・ヨーロッパ病院」に寝泊まりし、18日まで主に手術を担当する。帰国後はガザの実情を知ってもらい、支援の輪を広げるため、市民向け報告会を開く予定だ。

現地の活動は危険と隣り合わせで、6月1日にはデモに参加して負傷した人の救済を、ボランティアでしていた21歳のパレスチナ女性看護師が、イスラエル軍の銃撃で死亡している。猫塚さんは多くの重傷者が出ており、助けられないわけにはいかない」と力を込める。

WHOの医師報告書によると、負傷者のうち約3500人は銃で撃たれたとされている。特に脚を撃たれた人が多く、一刻も早い手術が必要になるが、短時間で多数の負傷者が運び込まれるため、WHOの緊急医療チームや、国際医療支援団体「国境なき医師団」だけでは医師が足りず、治療の遅れから脚を切断せざるを得ない患者も多く出ている。イスラエルとの境界にある検問所も封鎖され、救急車も容易に通行できない状態が続いている。

猫塚さんは「多くの命救いたい」と話す。猫塚さんは「多くの命救いたい」と話す。



# 「ガザ 救急医療追いつかない」

## 空爆で退避 札幌・猫塚医師が会見



ガザ地区の病院で、脚を撃たれた患者を治療する猫塚さん＝7月（猫塚さん提供）

中東のパレスチナ自治区ガザで7月上旬から医療活動に携わっていた勤医協札幌病院（札幌市白石区）の整形外科医猫塚義夫さん（71）が帰国し、24日、道庁で記者会見した。滞在中にイスラエル軍がガザを空爆し、退避を余儀なくされた猫塚さんは「眠れない夜を過ごした」と振り返り、パレスチナ人の負傷者が増え続けている「救急医療が追いつかない」と窮状を訴えた。（荒谷健一郎）

猫塚さんは「北海道パレスチナ医療奉仕団」団長で、2010年から現地で医療活動を行う。3月末以降、在イスラエル米大使館のエルサレム移転への抗議デモでパレスチナ人が、イスラエル軍の攻撃で140人以上が死亡し、1万数千人が負傷。猫塚さんは世界保健機関（WHO）の要請で4日にガザ入りし総合病院で手術などを担当した。14日昼にイスラエル軍が

ガザを実効支配するハマスの関連施設数カ所を空爆。猫塚さんは3ヶ月前のアップデートにおいて無事だったが、「ドーン」という大きな音がして地面が揺れたという。すぐに日本政府関係者に退避を求められ、14日はアパートを一步も出ず、15日朝、2週間の滞在予定を早めてガザを出た。ガザ保健当局によると、空爆でパレスチナ人少年2人が死亡、10人以上が負傷したという。猫塚さんは10日間で他の医師と共に200人以上を治療。デモ中は1日100人以上運ばれ、診療が追いつかないこともあった。傷口が広がる特殊な銃弾で脚を撃たれる人が多く、半数は切断が不可避な大けが。電気が1日3〜4時間しか来ず、スマートフォンで傷口を照らし手術などに当たった。猫塚さんは「（退避し）けが人を残すことは胸が張り裂け、後の髪引かれる思いだった」と語った。会見後の報告会では市民約60人を前に「非人道的行為を止めるため国際社会の世論の高まりが必要」と訴えた。

2018年(平成30年)7月16日(月曜日)

# 札幌の医師 ガザで奮闘



足に被弾した男性の治療に当たる猫塚医師（13日、ガザ南部の病院で）

【ガザ（パレスチナ自治区）金子靖志】イスラエルなどに対する抗議デモが続いているパレスチナ自治区ガザで、勤医協札幌病院（札幌市白石区）の整形外科医、猫塚義夫さん（71）が11日間にわたってデモの負傷者の治療に当たった。

## 猫塚さん、11日間支援

猫塚さんは約40年前、研究員として活動していた渡米先で人種差別を目の当たりにしたのを機に、弱者支援の重要性を感じ、紛争地などでの医療支援に関わるようになった。2010年には道内の医師ら約10人で医療支援団体「北海道パレスチナ医療奉仕団」を結成し、ガザではこれまで5回の医療支援を行った。今回は世界保健機関（WHO）からの活動要請を受け、今月4日、2週間の日程でガザに入り、国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）と協力して支援に当たった。猫塚さんが治療に当たったガザ南部の病院では13日夜、イスラエル軍の銃撃で負傷した数十人が次々と運び込まれていた。ほぼ全員が手足に実弾を受け、中には足の付け根

## デモに発砲 負傷者次々

を受けた銃弾で大量に失血し、瀕死の重体となった男性もいた。太ももに被弾した少年（17）の母親（40）は「どうか息子の足は切断しないでほしい」と涙を流して訴えた。負傷者の多くが10〜20歳代の若者で、猫塚さんは「銃弾の破片が体内に残っている患者も多く、感染症のリスクが非常に高い。デモに対して実弾を使用するイスラエル軍のやり方はあまりにもひどい」と話した。猫塚さんは、同軍の空爆が激しくなり、日本政府が退避を求めたため、日程を前倒しして15日に支援を切り上げた。デモは、70年前のイスラエル建国で故郷を追われたパレスチナ難民の帰還を求めて3月末に始まった。今月14日までの死者は約140人、負傷者は約1万6000人になっている。イスラエル政府は、ガザを支配するイスラム主義組織ハマスがデモを主導し、テロ行為が行われているとして攻撃の正当性を主張している。

ガザ 地中海に面し、広さは約365平方キロメートル（東京23区の約6割）、約200万人が住む。イスラム主義組織ハマスが武力制圧して実質的に支配している。イスラエルは周囲を壁などで封鎖し、人や物資の移動を厳しく制限。電気は1日約6時間、失業率は4割超と世界最悪の水準だ。





外岡 秀俊

「パレスチナで医師が足りない。救援求む」。勤医協札幌病院の整形外科医、猫塚義夫さん(70)に緊急メールが届いたのは先月下旬だった。発信元は世界保健機関(WHO)。猫塚さんはすぐに手をあげた。

米国は先月14日、在イスラエル大使館をテルアビブからエルサレムに移した。ガザ地区ではこれに抗議する群衆にイスラエル軍が発砲し、60人以上の死者が出た。負傷者も7日間で1万3千人。銃による負傷だけで3500人に上り、整形外科、血管外科の医師が圧倒的に足りない。そのSOSに応え、猫塚さんは来月2日に出発する。

猫塚さんは「北海道パレスチナ医療奉仕団」の団長として、これまで9回、パレスチナ自治区で医療支援をしてきた。

## 緊迫増すパレスチナ思う

きっかけは2008年末に始まったイスラエル軍によるガザの灯りを頼りに手術をする医師の姿がネットに流れ、居ても立ってもいらなくなつた。8年前から1回5〜8人の団員を率いて3〜4週間現地で支援をしてきた。飛行機代は自費、宿泊と現地の移動費は募金でまかなつた。

70年前、イスラエルの建国で約70万のパレスチナ人が故郷を追われた。1967年の第3次中東戦争でイスラエルはヨルダン川西岸、ガザ地区、東エルサレムを占領した。

93年のオスロ合意では西岸とガザにパレスチナ国家を作る「2国家共存」の道を模索し、パレスチナ自治政府は将来その首都を東エルサレムに置くことにしていた。

トランプ米大統領は、エルサレムを首都と宣言することで、これまでの長い和平交渉の根幹をひっくり返したことになる。

「ガザ地区は札幌市の3分の1の広さ。そこに札幌に近い200万近くのパレスチナ人が押し込められている」

今月9日、猫塚さんは元イスラエル兵士のダニー・ネフタセイさんと札幌で対話集会に出席し、そう切り出した。ガザ地区は10年以上完全封鎖され、「天井のない牢獄」と呼ばれる。電気が通るのは1日4時間。失業率は4割で、若者に限ると6割。水や土壌の汚染も深刻だ。分離壁は地下深くまで埋められており、地下水も断たれる恐れがあるという。

18歳から3年間の徴兵を終えて日本に移住したダニーさんはこう話した。

「私は『国のために死ぬのはすばらしい』と教えられ、空軍に入った。だが戦闘機は国を守るのではなく、人を殺し物を破壊する。同僚は、戦闘機が飛ばすイスラエルの子はゆっくり眠れると言った。だがパレスチナの子は眠れない夜を過ごす」

私も2回、パレスチナで取材したことがある。その経験から推して、今回は緊迫の度合いが違うと感じる。

日本は73年前に平和への道を歩み始めた。しかしその後もずっと、眠れぬ夜を過ごす人々がいる。そのことを、忘れずいたいと思う。

(ジャーナリスト・作家)

## 「第9次、第10次パレスチナ医療・子供支援活動」報告

---

発行日 2018年9月

発行 北海道パレスチナ医療奉仕団

発行責任者 団長 猫塚 義夫

〒065-0019 札幌市東区北19条東22丁目5-13 ☎090-8274-3163

<http://www.hms4p.com> E-mail: [hokkaido.palestine@gmail.com](mailto:hokkaido.palestine@gmail.com)

支援募金振り込み先

振替口座: 02720-9-100675 振込先口座: ゆうちょ銀行 二七九店 (279) 当座 0100675